

同	同	二五五、五	八五、五	三三、七	同
同	同	一一、五	三九、〇	二五五、五	同
同	同	一九六、五	一五〇、八	四五、七	同
同	同	一九六、五	一五〇、八	四五、七	同

備考 蠶豆單作で三月二十日刈取成績である

以上の様に播種期の早い程生草收量が多い。

四、肥料としては酸性土壤を嫌ふ作物であるから肥料石灰を豫め相當施用して置かねばならない。其他の肥料は特に施用する必要がない場合が多いであらうが反當過燐酸三貫、硫酸加里一貫又は木灰一〇—一五貫施用すれば尙更よい。

五、根瘤菌の接種 蠶豆を播種するときに根瘤菌の接種を忘れてはならない。前年接種しても土壤中の根瘤菌の空素固定力は次第に弱つて行くのであるから毎年活力の強い根瘤菌を接種せねばならぬ。

(一)根瘤菌接種の効果 (長崎農試)

区	別	反當莖葉	同上根部	莖葉窒素	莖葉窒素固定量	同上比率
接	種	九三〇貫	四八貫	〇、三四	三、一六三貫	100

無	接	種	區	二四三	三〇	〇、三〇	〇、七九	三三
---	---	---	---	-----	----	------	------	----

備考 畦巾二尺、株間八寸、十月十五日播種、十月十二日刈取

(二)同 上 (長崎農試)

反	當	生	草	量	無	接	種	區	接	種	區
九	月	二	十	五	日	二	〇	八	、	一	貫
十	月	五	日			一	八	五	、	〇	
十	月	十	五	日		一	七	五	、	七	
										二	一
										〇	〇
										二	〇
										二	〇

備考 桑園隔畦播種、播種量反當四升五合生育期間一七〇日

六、生育中の管理 としては生育初期に除草する位である。

七、收穫及分量 栽培法に依つて異なるは勿論であるが大體の處で桑園間作では採桑の關係上收穫時期は三月中、下旬である。之の場合の收量は桑園全畦で五〇〇—六〇〇貫。一畦置きで二〇〇—三〇〇貫位、畑で蠶豆のみの單作で七〇〇—一〇〇〇貫位であらう。霜に對して相當弱いから霜の多い年は霜害の爲めに三月頃の方が生草の多いことがあるが單作のと

きは満開少し前が刈取適期である。

肥料成分含有量は生育程度によつて相異なるが平均して

水分	窒素	磷酸	加里
八、四〇%	〇、三三%	〇、一〇%	〇、二〇%

八、**施用法** としては草丈の低いものは其儘鋤込んでもよいが長いものは二つ又は三つ切にして鋤込むと分解が早く、肥効を高める、之の際に分解に依つて生ずる酸を中和するため生草一〇〇貫に對して肥料用石灰五貫位施用すること。

四、採種法

採種は畑作と水田裏作として行ふ二つの場合がある。

一、**畑作の場合** 肥沃な畑地では莖葉が繁茂し過ぎて結實不十分になることがあるから、地力は中庸或は以下の處で排水良好な日當りのよい壤土地を選ばなければならない、畦巾は二尺株間八寸位で一處に二―三粒播種すると反當播種量は八升位となる。蠶豆は酸性を嫌ひ、

加之石灰を好むから耕起畦立前に肥料用石灰を酸度に應じて施用するは勿論のこと之の外に反當十五貫位施用して置くことよい。

肥料としては元肥のみで過磷酸三貫硫酸加里一貫位施用するとよいが、施用しなくてもよい場合が多い、加里肥料として木灰を施用する場合は反當十五貫位を播種後覆土した上に撒布して置く、播種期は早くなると徒らに莖葉が繁茂するから十月下旬頃が適期である。

生育期間中の管理としては初期に除草する位であるが三月上旬頃より黒斑病及褐斑病が発生し、莖葉に褐色の斑點を生じて遂には枯死に至ることあり、又莖が出來てからは象蟲の成蟲が卵を産付けに來るのである。

之等の防除法としては三斗式石灰ボルドウ液(水三斗に石灰及硫酸銅各一二〇匁)を三月上旬頃より一週間置位に三―四回撒布し、最後の二―三回は象蟲防除のために特に上記の液三斗に付硫酸鉛一ポントを加用する。又蚜蟲が発生したときには除蟲菊石鹼水(水一斗に除蟲菊粉二〇―三〇匁石鹼二〇―二五匁)を撒布する。

開花期は比較的長期に亘るが五月上旬の頃のものには結實不可能、加之莖葉は伸長するから

頂部から五寸位の處で摘心し結實を確實にせしめる様にする。

收穫は最上部の莢が黒色となれば抜き取り乾燥調製する。

二、水田の場合 は稻の立毛中に刈取二―三週間前に落水して播種するのである。畦巾は三尺―四尺株間は七、八寸として一ヶ所に二―三粒播種する、肥料としては木灰十五貫位を播種した上に施用する。稲刈取後簡易な畦立をなし、排水する様に努める、その他は畑地の場合に準じて行ふ。

第八章 ルービン

一、特性

ルービンの葉は非常に特長ある、掌状をなし、それが七―九個に分岐して居る。草丈は三尺前後にもなり、本縣の様な暖かい處では四尺にも及ぶのである。

ルービンは比較的新しい緑肥作物であるが他のものよりも優れて居る點が多い。即ち多く

の緑肥作物は一般に連作は芳しくなく、酸性土壤には總べて弱いのであるが、ルービンは連作によく、酸性にも極く強いのである、加之耐寒性が強く、採種が又容易に出来る。適地としては砂壤土又は壤土がよいのであるが、粘質土にもよく生育する。

主として果樹園、茶園、桑園等に栽培せられて居る。

二、種類

種類には花の色に依つて白花種、青花種、黄花種の三種類あるが、白花種及青花種は切花専用で緑肥用としては黄花種が主として用ひられて居る。

三、栽培法、成分量及施用法

一、播種期 としては多くは秋播で九月下旬から十月上旬が適期で春播としては三月下旬から四月上旬である。播種期と生草収量との關係を示すと。

播種期と生草収量 (長崎農試)

播種期 月日	期反當生草量	同上比率	播種期 月日	反當生草量	同上比率
九、五	一、七三貫	100	一〇、二五	一、八八四貫	108
九、二五	一、六八六	九三	一〇、二五	一、三八九	九七
九、二五	一、八六六	108	一一、五	一、〇六一	六二
一〇、五	一、九八三	113	一一、五	七八四	四七

備考 畦巾一尺五寸、株間六寸、三粒播、五月二日收穫、肥料過磷酸五貫、木灰一五貫

二、播種量 はルーピン單作の場合は反當三升内外で充分であるが、桑園、果樹園、茶園等の間作に於ては播種方法により相異なるのであるが大體二升前後で間に合ふ。

三、播種法 はルーピン單作の場合は畦巾二尺株間八寸で二―三粒播きが標準であるが、間作を行ふ場合は畦間の中央に一條或は二條播とし點播或は條播とする。水田麥作の間作をなすときは大體青刈大豆に準じて五尺畦の兩肩に一條宛播種する。小麥中の間作は刈取後の生育期間が短いから芳しくない。

四、根瘤菌の接種及肥料 ルーピンは比較的新しい綠肥作物であるから土壤中に根瘤菌がな

い場合が非常に多いのであるから必ず接種する様心掛けねばならない。次に接種の効果を示すと

根瘤菌接種の効果 (長崎農試)

區名	草丈	反當生草量	同上百分比
無接種	二三種	六一、八〇貫	100
接種	五種	九二、一〇〇	150

備考 桑園間作、全園全畦、畦間五尺 十月三日播種 三月二十五日調査

右の様に根瘤菌接種の効果は大である。特に始めて播種する處では接種しなければ肥料を施用するとも生育は覺束ない。

肥料としては特に施用しなくてもよいが過磷酸三貫、硫酸加里一貫位施用すると尙更よい。

五、收穫及肥料成分含量 生育中の管理としては除草位である。收穫時期は桑園では採桑の關係上三月中旬刈取鋤込むが果樹園及茶園では四月中下旬乃至五月上旬頃で桑園一畦置きで、反當生草量は二〇〇―三〇〇貫、全畦で五〇〇―七〇〇貫、

果樹園及茶園では全畦で七、八〇〇貫位の収量はある。今當場で各地に委託した成績を示すと次の通りである。

間作と生草量 (長崎農試)

委託地	園別	播種期 月日	收穫期 月日	草丈	反當生草量	備考
島原町	桑	10、5	5、7	2、8尺	834貫	全畦
愛野村	桑	10、4	5、7	2、9尺	795	一畦置二條播
茂木町	枇杷	10、10	5、2	2、3尺	1、830	全畦
神浦村(西)	桑	9、27	5、14	3、0尺	1、244	同
江迎村	桑	10、5	4、25	2、8尺	1、036	同
上志佐村	茶	9、25	4、26	3、0尺	1、560	同

ルーピン生草中の成分量は平均して窒素〇、三五%、燐酸〇、一〇%、加里〇、二五%である。

六、施用法 刈取つてから二つ又は三つ切り位にして、二―三日乾かして半乾燥として鋤込

む、之の際に生草一〇〇貫に對し石灰五貫を撒布して鋤込むと分解の際に生ずる酸を中和して肥効を促進せしめる。

四、採種法

採種をなす圃場は特に肥沃の處でなく地力中庸の處がよい。播種期が早いと莖葉が繁茂して結實が不十分となることがあり、又遅過ぎると生育不良となるから適期を選ばなくてはならない。

ルーピンの播種期と採種量 (長崎農試)

播種期 月日	反當採種量 石	百分比	播種期 月日	反當採種量	百分比
9、5	1、591	100	10、15	1、855石	115
9、15	1、304	101	10、25	1、622	102
9、25	1、271	102	11、5	1、599	101
10、5	1、115	125	11、15	1、599	101

右の成績の様に十月上旬前後が適期である。

播種量は反當三升位でよい。播種法は畦巾二尺、株間八寸位にして一ヶ所に二―三粒播種する。之の際に根瘤菌の接種は忘れてはならない。生育は何等病害に犯されることなく大體順調に進むものであるが、生育初期には除草はせねばならない。成熟期は六月上中旬頃で、種子が一様に成熟しないから二―三回に亘つて採種せねばならない。莢を採り、二―三日蒔の上でよく乾燥してから棒でたゞいて種子を出し、唐箕に掛けて調製貯蔵する。反當採種量は何回にも町疇に採種すれば收量多きも採種時期は甘藷の蔓挿し、田植等を控へ充分に採種することの出来ない時にあるから大體一石―一石五斗位である。

第九章 ザイトウキン

一、特 性

ザイトウキンは野生のヤハズエンドウに似て蔓性のよく生育する一年生又は越年生の莢

科植物で五―六尺に達するのは普通であるが十數尺にも達することがある。排水のよい砂壤土が最も適して居るのであるが、如何なる土地にも生育し、生草多く、成分も高いから肥料にもなり飼料にもなり加之寒氣にも耐へ、收穫は年二回行ふことが出来、酸性土壤、瘠地等にも生育し嫌地を起すことが少い。

多くは桑園、茶園、果樹園等の間作として栽培せられ、又水田の裏作及水田裏作麥の間作として栽培せらる。

種類としては種子の色の褐色、黒色、黒褐色、白色等のものあり。

二、栽培法、成分量及施用法

一、水田裏作 水田の裏作として栽培するには凡て紫雲英に準ずればよい。即ち播種期は十月上旬頃落水し田面に足跡の付く位の時立毛中に三升位の割合で撒播するのであるが播種早きに過ぐれば幼植物が徒長し軟弱になり寒氣のため枯死することもあり又稻株に卷付き稻藁と共に刈取らるゝ惧れがあるから立毛中に二三寸位に伸長する程度に發育せしめて置くの

が適當である。生育中の管理は凡て紫雲英と同一であるが特に排水に注意を拂はねばならぬ。刈取期は五月下旬から六月上旬が適當である。ザイトウキッケン栽培に當つては新緑肥であるから特に根瘤菌の接種を忘れてはならぬ。

肥料としては磷酸及加里肥料を稻刈取後又は三月頃撒布すると良好なるは紫雲英の場合と同様であるが就中磷酸は特効がある。

磷酸肥料と生草收量 (埼玉農試)

區名	反當生草量	比率	備考
無肥料	四九、七三貫	100	
磷酸單用	四三、五三七	101	反當 過磷酸六貫
加里單用	四九、八六七	115	硫酸加里一貫
磷酸加里併用	八四、二九七	106	精過石六貫、硫加一貫
普通肥料	八三、四四六	112	精過石六貫、藥灰十貫

磷酸用量と生草收量 (島根農試)

區名	反當生草收量	同上百分比
無肥料	六五、五貫	100
過磷酸五貫	六六、五	101
同 七貫	八二、五	124
同 一〇貫	九五、七	146

右の様にザイトウキッケンに對しては過磷酸の特効があるから稻刈取後又は三月頃反當五貫、硫酸加里一貫又は草木灰十五貫位施用するとよい結果を得られる。

二、桑園間作

桑園に播種する時期は大體十月上旬が適期である。

多少は嫌地になる傾向があるのであるから毎年ザイトウキッケンを栽培する場合は一畦置に條播することが必要な條件であるが、毎年栽培しないならば全畦に播種するも差支へない、播種量は一畦置きの場合には反當一升五合、全畦の場合には三升位を標準とする。播種する場合に根瘤菌の接種は忘れてはならない。

根瘤菌接種の効果 (長崎農試)

區名	草丈	反當生草量	同上百分比
無接種	一五〇	三二七、五〇貫	100
接種	一三五	四四五、五〇〇	120

備考 桑園間作十月三日播期 全園全畦三月廿五日調査

伸長の特に良好なときは桑樹に卷付いて生育を阻害することがあるから蠶豆と混播すると之の害が除かれるし、又三月上旬頃地上部を刈取つて鋤込み或は家畜の飼料に供し、刈取後再生した新芽を伸ばして六月上旬頃鋤込むのも有利である。

三、果樹園、茶園間作 果樹園の間作とする場合には梨葡萄の如き落葉果樹中が適當であるが柑橘の如き常緑果樹類でも株間(樹間)の広いものであればよい。然し株間の狭い常緑果樹園では徒長甚しく葉數少なく地際は殊に病害に侵されて收量を著しく減少することがある。果樹園の間作としては十月中下旬頃園内に巾二尺位の低い畦を立て其の中間に反當二―三升位の割合で條播する。作條は各果樹の中央に位するやうにし施肥其の他の作業に支障を來さないやうにする。收穫は桑園間作に準ずるが收穫の遅れないやうに注意する。若し生育良好

なる場合は三月中旬頃第一回刈取を行ひ六月上旬頃第二回の刈取をなし園内に鋤き込む。

四、收穫及肥料成分量 收穫時期は水田裏作、茶園、果樹園等では五月下旬から六月上旬で反當收量は栽培法に依つて相異なるが大體四〇〇―六〇〇貫位である、又桑園間作の收穫期は多くは三月中旬頃であるが六月上旬の場合もある、三月中旬頃の刈取であるの一畦置き播種のもので二〇〇―三〇〇貫全畦のものは四〇〇―六〇〇貫、又畑地の間作で二回刈取の場合第一回刈は三〇〇貫前後、第二回目も略々同量である。
ザイトウキツケンの含有成分量は左の通りである。

ザイトウキツケン含有成分量 (%)

採取時期	水分	窒素	磷酸	加里
盛花 期	八五、三	〇、五七	〇、一五	〇、四九
三月二十五日(莖葉)	八五、三	〇、五七	—	—
同 (根部)	一〇、三	〇、五九	—	—
多くの平均		〇、五九	五、一	〇、二〇

(三重農試)
(長崎農試)
(同)

三、採種法

ザイトウキツケンの成熟期は七月上旬であるから水田に栽培したのでは田植の関係上採種が困難である。依つて採種圃は畑地に單作とする必要がある。尙採種栽培では特に播種量を減じて薄播とせねばならぬ。而して畦間は二尺—二尺五寸位株間は一尺—一尺五寸で可成廣播とするがよい。特に梅雨期に遭遇するため往々病蟲害を被ることがあるから努めて日光及通風の佳良なるやう心掛けねばならぬ。播種量は反當六—七合で足りる。又播種期も絲肥用より二十日位遅れて播種し徒長を防ぐやうに工夫せねばならぬ。ザイトウキツケンは採種用とせる場合は必ず支柱を立てねばならぬ。支柱を立てる時期は三月上旬が適當である。

支柱の種類と收量 (福岡農試)

試験區別	子實收量(反當)	同上百分比
無 支 柱	五三石	100
支 柱 繩 張	一、〇九九	二二

支柱 枝付竹

一、三三九

二五七

右の成績で判る通り竹の手に入り易い地方では必ず枝付竹を立て、やり倒れないやうにする。かくて七月上中旬頃になれば大部分の莢は暗褐色となるから晴天の朝方靜かに刈取つて脱穀する。枝付竹を支柱としたときは刈取が稍々不便であるが出来る丈莢を脱落せぬやうに叮嚀に取扱ふがよい。反當收量は大體六、七斗であるが一石三斗にも及ぶことがある。一升重は三八五—三九五匁、同上粒数は二九、〇〇〇—三三、〇〇〇粒を算する。

四、ザイトウキツケンの飼料的價值

ザイトウキツケンは前述の通り年二回刈をなすことが出来る。即ち第一回は三月下旬頃で家畜に供給する生草の少ない時期であるから此の時期に地際三四葉を残して刈取り家畜に飼草として供給し新たに再生した部分を六月中旬頃刈取り肥料として使用することが出来る

刈取時期及回数と生草收量 (三重農試)

刈取回数	刈取時期	反當合計收量	同上窒素固定量
二回	十二月末日及盛花期	七六三貫	四、三九貫
三回	十二月末日及盛花期	六三八	三、五八一
二回	四月末日及盛花期	七〇三	四、〇〇八
二回	四月十五日及盛花期	六八七	三、九二三
二回	五月一日及盛花期	六五〇	三、一九三
一回	初花期	七六四	四、四六八
一回	盛花期	八三〇	四、七六
一回	終花期	七六八	四、四九四

右の表に依れば十二月末日及盛花期の二回並四月末日及盛花期の二回に刈取つたものも生草量及窒素量共に初花期一回刈の場合に比して左程劣つて居ない。これ即ち本緑肥の飼料作物として適する所以である。しかし飼料並に緑肥として栽培する場合は播種に際して特に根

菌を接種すると共に草木灰反當二十貫内外又は硫酸加里一一、五貫、普通磷酸五貫を施用して其の生育を旺盛ならしめる必要がある。又ザイトウキツケンの飼料的價値に就いて左表の通り優良なることが報告されて居る。

ザイトウキツケンの飼料的價値 (%) (三重農試)

	水分	灰分	有機物	粗蛋白質	可溶性無窒素	粗脂肪	粗纖維
ザイトウキツケン	八五、六七	一、〇九	一三、二四	三、四四	五、一一	〇、二二	四、四九
紫雲英	八八、四九	〇、九〇	〇、六一	二、六三	四、七三	〇、三〇	二、九五

本縣に於ても家畜の飼養旺んなる地方に於てはザイトウキツケンを栽培し以つて家畜飼料を得ると共に畑作緑肥に依つて其の改善を期することは有畜農業を一層合理化せしめるものである。

第一〇章 ヘアリベツチ

ヘアリベツチはザイトウキケンと同様ベツチ類の緑肥作物でザイトウキケンよりも稍々耐

寒性、耐濕性があり、開花始は五月下旬で終りは七月に及び期間が長く、又早春の生長繁茂はザイトウキケンよりも少し遅れるが寒地では寒氣によく堪へ腐敗することが少い。栽培方法はザイトウキケンに準ずればよい。

反當生草は大體三〇〇—七〇〇貫で含有成分量は次の通りである。

ヘアリベツチの成分量 (%)

	水分	窒素	磷酸	加里	石灰	有機物
生 草	八二、二	〇、五	〇、五	〇、四	—	一八、二〇
乾 草	一六、二〇	三、四八	〇、九二	二、三三	二、〇五	七六、二六

第一章 セラデラ

一、特 性

セラデラの葉は楕圓形で羽狀複葉をなし莖葉共に短き細毛を密生する。莖は二—三尺に生

長し細くて軟柔で良く分岐擴撒する性質があるから綠肥として有利な作物である。種子は粒々念珠狀に連續した莢の内に藏され、莢と分離し難い。

適地は高燥な輕鬆土を最適とするが排水可良の砂質土ならば平坦地でも良く繁茂する。水田の裏作としては良成績を擧げ得ないが、茶園、果樹園、桑園等の間作としては至極良好である。吾が國の土壤には之の根瘤菌を缺いで居ることが多いから始めて栽培する場合は接種するを安全とする。

二、栽 培 法

一、播種期 は九月中下旬が適當である。

播種期及根瘤菌と生草量 (反當) (長崎畜試)

區 名	播種期	九 月 二 十 五 日	十 月 五 日	十 月 十 五 日
無 接 種		九、〇〇貫	三、五〇貫	一〇、二〇貫

接 種

一六、〇〇〇

一三、一〇〇

六五、八〇〇

桑園間作、畦間六尺 一畦置條播、四月二日調査、播種量反當八升

二、播種量 桑園間作で一畦置の場合反當〇・八一升、全畦及茶園其の他の園地に於ては二升乃至三升位を最適とし普通畑地では三升乃至四升位である。

三、播種法 茶園や桑園では畦間に一條に播き果樹園では二條又は三條播にするか又は輪播にするのであるが、セラデラは概して點播の方より條播の方が有利である。又根瘤菌は右の表の様に特に効果があるから接種は忘れてはならない。

三、生草含有分量

根瘤菌の接種と莖葉成分量 (%) (長崎農試)

接 種	區 名	播種期		窒 素	水 分	窒 素	水 分	窒 素
		九月二十五日	十月五日					
接 種	種	八三、九七	〇、四八	八七、三三	〇、四一	八七、五七	〇、三七	

無 接 種

八三、五二

〇、三九

八三、七二

〇、二九

八二、六三

〇、二八

右の様に莖葉中の成分は根瘤菌の接種如何に依つても大變相違する。

セラデラの含有成分量 (%) (三重農試)

生 草	水 分	窒 素	磷 酸	加 里
八五、四	〇、四八	〇、一〇	〇、一〇	〇、六〇

四、收穫及施用法

收穫期は五―六月頃開花、最盛期に刈取れば良い。收量は畑作の場合の反當生草收量は五百貫内外で千貫に及ぶ事もあり間作の場合は二―三百貫の收量がある。

施用法は一般綠肥作物に準ずれば良い。

五、採 種 法

採種圃は排水良好なる中庸な土壌を選び、播種期は十月中旬頃、畦巾は二尺位で之に條播にする。セラデラの種子は莢と分離し難いから莢付のまま播種するので大體反當四升位要し、

肥料は元肥として反當過磷酸五貫、草木灰二〇貫施用する。

登熟期は六月中旬頃だが不整だから六―七分位成熟した頃に刈取り架乾後棒で叩いて調製貯蔵する。

反當收量は四―五斗位、一升粒數約二七七、五〇〇粒、重量一六五匁内外

第二章 豌豆

一、特性

豌豆は概して寒冷に堪える力強く田畑何れにも容易に栽培されるものであるが、壤土乃至砂壤土で石灰に富んだ處を好み、強粘土地には適しない。又連作を忌むことが甚だしいので二年乃至數年の間隔を置かねばならない。

二、品種

豌豆の品種も甚だ多いが、赤豌豆、青豌豆、莢豌豆等の中から各地方に最適する品種を選ぶべきであるが一般に中粒赤豌豆が適當である。

三、栽培及施用法

一、播種期 播種の適期は十月下旬でそれから遅れても相當の生育をなすものであるが、春季に播種したものは成績甚だ劣るものであるから適當な時期を過した場合でもなるべく其の年の内に播種するのがよい。

二、播種量 乾田や畑地では一段歩に一斗内外とし濕田の高畦及果樹園では五升内外が適當である。

三、播種法 條播又は點播とし、莖葉伸長して卷鬚が生ずる様になつたら支柱を設ければ生育を良好にする。或は支柱の代りに蠶豆又は小麥等と混植するのもよい。

四、收穫及施用法 豌豆の刈取期は五月下旬又は六月上旬頃で最初に開花したものゝ落下した頃即ち開花の最盛期か、其の前後が適當である。たゞ普通の畑地等であまり收穫を急ぐ必

要のない時には、早きに過ぐるより、晚れた方が収量が多いやうである。収量は水田の高畦に栽培したものは一段歩に生草三、四百貫位、畑地や乾田では八百貫乃至千貫位の収量がある。又桑園や果樹園では二〇〇—三〇〇貫内外の収量がある。

施用法は刈取り、二つ又は三つ切として鋤き込む、この際分解促進のために生草百貫に對し肥料用石灰五貫位を撒布する。

四、肥料分量

生	草(%)	窒素	磷酸	加里
	18.0	0.11	0.11	0.11

第三章 苜 蓿 (もくしゆく)

一、特 性

種子は螺旋狀の莢で包まれ、莢は強靱で種實と分離することは頗る困難であるから莢のまま播種する。一莢に種實四—五粒を藏し黄褐色乃至暗褐色にして腎臟形をなし紫雲英種子よりも小形である。苜蓿の長所は移植に適し生草中の窒素分が多く寒氣及び水濕に耐へることは紫雲英よりも強いし、又強健で病蟲害に犯さるゝ事少く適地は砂質土、粘質土何れでも排水さへ良ければ生育する。苜蓿が島根縣の簸川平野に今日の如く普及された理由は簸川地方は濕田多く古來稻刈取後是れに高畦を作つて土壤の風化を計り且つ深耕を行ふ慣習があり、高畦を作る時期は水稻收納後であるから畦上に栽培すべき適當な作物がない。處が苜蓿が移植に適し且つ濕潤に耐へる力が強いので山陰地方の如き濕田の多い地方には詭向の綠肥作物となつたのである。

二、品 種

品種は四種程分離せられて居るが小苜蓿が現今最も廣く栽培せられ草丈は三—四尺で五月下旬收穫する。大苜蓿は小苜蓿から選出されたもので莖葉、種實共に著しく大形で草丈四—

五尺に及び熟期は少しく遅く六月上旬收穫す。無刺苜蓿は大苜蓿より選出されたるもので莢に全然刺毛がないのを特徴とし、種子の取扱に便で、其の莖葉等の形質は大苜蓿と同様である。紫苜蓿は小苜蓿中に莖葉暗紫色のを發見され、之を繁殖したるものであるが實用上の價値は乏しい。

三、栽 培 法

乾田には直播し濕田には高畦を作つて移植する。

一、播種期 播種の適期は大體紫雲英に準ずる。島根縣では九月上旬を適期とし移植用の苗は遅くとも秋の彼岸迄に播種するを要し、直播する場合は九月下旬迄はよいが、十月に入ると著しく収量を減ずる。本縣地方の濕田にて直播の場合には九月中旬より十月中旬迄に播種すれば宜しい。

二、種子の鹽措 播種前莢付種子を一晝夜計り水に浸積し良く水を切り種子一斗に對し藁灰七―八升を充分に混和して播種する。藁灰の無い時は木灰にてもよろしい。即ち莢に毛が多

く、水分を吸收保持することが困難で發芽し難い場合が多く、加之種子取扱ひに便なる外に肥料としても必要なるものである。

三、直播法 直播法は從來稻の立毛中に點播を行つたものが、勞力を多く要するので最近は撒播を行ふ様になつた。この場合の播種法は紫雲英と全く同様で種子は反當一石乃至八斗位である。點播は約二尺平方に一株の割合で稻四株の中央に徑約五―六寸の圓形に均一に播いて踏み付け、土又は堆肥で薄く覆ひ再び踏み付ける。肥料は十二月中旬頃木灰一〇―一五貫過磷酸五貫を撒播の場合は全面に撒布し點播の場合は株の周圍に施す。

四、移植法 苗床は高畦面積一段歩に對し約三十坪を準備し九月上旬に一尺乃至一尺三寸の距離に畦を切り、畦面を平にして人糞尿を三荷位施し其の上に一坪當種子一升五合の割合に幅廣に條播し良く踏み付け薄く土を覆ひ藁を敷いて置く。苗床地が乏しき時は撒播する。撒播の場合は一坪に付き種子二升内外を要する。發芽後は敷藁を去り時々雜草を除く。高畦築造は田地排水の良否により其の高さ及幅を異にする。畦間の溝は畦幅の二倍位を普通とし排水不良の停滯水ある水田では畦の高さ二尺以上幅二尺位とし六尺に一畦とする。移植期は

十一月中旬より十二月中旬迄に行ふとよいが都合によつて遅れる時は寒中を避けて三月上旬迄に行ふ。移植法は苗群を五、六寸角に鎌で苗床を切り次に鍬にて一群宛に分ち土付の儘本田に運び畦上に株間一―二尺となし先づ移植部の土を軟げ肥料を置き苗一群を置きて良く踏み付ける。四、五月頃に至り畦が乾燥し過ぎると苜蓿の生育を害するから、斯かる場合には畦間に水を湛へる。肥料は移植一株に付き過磷酸十匁位を施し更に三、四日を経て藁灰なら二十匁木灰なら十匁を施す。

五、收穫及施用法 苜蓿の收穫は五月下旬頃莖の下部にある莢が稍黄色を帯びたる時即ち開花旺盛の時期に刈取るのがよい。刈取りたる苜蓿は乾田ならば之を五、六寸に切つて田面に撒布して鋤き込み高畦栽培の場合には高畦の肩落しをなし畦間を稍々平にして撒布し畦を崩して覆土する。收量は島根縣の例は乾田に撒播せるものは段當生草八百乃至千貫點播せるものは六百乃至八百貫にして高畦に移植する場合には植付面積に依り大差あるも普通二百乃至三百貫である。熊本縣八代郡の例は乾田に段當種子六斗を點播した場合段當生草最多二千二百貫最少千貫普通千六百貫位を收穫して居る。以上の様に多量生産した場合には其の大部分

を他に搬出しなければならぬ。

四、含有成分量

苜蓿の生草中の肥料含有成分量は他の綠肥類に較べ概して多し。

苜蓿生草含有成分量 (%)		水分	窒素	磷酸	加里	風乾歩合
島根農試	八三、六	〇、七	〇、一	—	—	二五、三
熊本農試	—	〇、三	〇、一	—	—	三三、八
多くの平均	—	〇、七	〇、一	—	—	—

五、採種法

採種を行ふ場合は普通栽培よりも疏植し施肥量も減じて徒長を防ぐ。開花後莢の褐色を帯びてくる頃地上に匍匐して居る莖を直立させてその上部を藁にて束ね種子の過半が黄褐色に

變じた時之を刈取り其儘日光で乾燥後莢を打落し莖葉及塵芥を去り且つ不良種子を選別する。
段當收量莢付まで約十石(一石中の種子は四―五升)其の重量五十貫内外である。

第五、農作物標準肥料

第一章 米麥標準肥料

一、水 稻

(一) 苗代肥料

(一) 山間部及冷え易き地方

肥料名	坪肥量	元肥	追肥	坪當三成分量	施用上の注意
硫酸安	三〇―三〇外	三〇―三〇外	―	窒素六、一―七、二外	一、硫酸の代用として 人糞尿施用の場合 一、一〇〇―一、五〇〇貫
普通過磷酸	三〇	三〇	―	磷酸 八、七	一、草木灰の代用として 硫酸加甲施用の場合は一五外
草木灰	一五〇	一五〇	―	加里 九、〇	

(二)地味比較的中庸なる地方
(イ)其の一

肥料名	坪當 施肥量	元肥	追肥	坪當三成分量	施用上の注意
完熟堆肥	五〇〇 ^外	五〇〇 ^外	—	窒素 七、六 ^外	一、硫安の代りに人糞尿施用の場合は一貫外
硫安	二五	二五	—	磷酸 九、〇	一、草木灰の代用として硫酸加里施用の場合は一〇外
普通過磷酸	三三	三三	—	加里 八、五	
草木灰	一〇〇	一〇〇	—		

肥料名	坪當 施肥量	元肥	追肥	坪當三成分量	施用上の注意
鱈ノ粕	四〇 ^外	四〇 ^外	—	窒素 六、七 ^外	一、硫安の代用として人糞尿施用の場合は一六〇〇外

三、紫雲英施用の場合

肥料名	坪當 施肥量	元肥	追肥	坪當三成分量	施用上の注意
硫安	一五	一五	—	磷酸 九、九	一、草木灰の代用として硫酸加里施用の場合は一五外
普通過磷酸	三〇	三〇	—	加里 九、〇	
草木灰	一五〇	一五〇	—		

肥料名	坪當 施肥量	元肥	追肥	坪當三成分量	施用上の注意
紫雲英(生)	一、〇〇〇 ^外	一、〇〇〇 ^外	—	窒素 八、〇 ^外	一、紫雲英は少くとも播種二週間に肥料用石灰を同時に撒布して鋤込んで置くこと
硫安	二七	二七	—	磷酸 八、七	一、草木灰の代用として硫酸加里施用の場合は一〇外
普通過磷酸	三五	三五	—	加里 九、〇	一、硫安の代用として人糞尿施用の場合は一七〇〇外
草木灰	一〇〇	一〇〇	—		
肥料用石灰	五〇	五〇	—		

備考 紫雲英は分解し難き山間部とか冷え易き地方は禁物で地味比較的中庸なる地方に於てのみ施用すること

(二)本田元肥

(一)安山岩、火山碎屑岩、第三紀層、沖積層地帯

(長崎縣臨時配合肥料 第一號)

適用地域 縣下一圓

土質 安山岩、火山碎屑岩、第三紀層、沖積層
土性 壤土、埴壤土

基準原料名稱	基準配合割合	保證(表示)成分量(百分中)
大豆油粕	1,000貫	窒素全量 7,50
鱈搾粕	1,100	アンモニア性窒素 5,90
硫酸アンモニア	2,900	磷酸全量 6,60
可溶一六過磷酸石灰	3,700	可溶性磷酸 5,80

硫酸	加里	1,100	加里全量	5,70
計		10,000	水溶性加里	5,70

施用方法 地力中庸本縣獎勵品種普通栽培の場合次の通り施肥する。

元肥 堆厩肥 反當 三〇〇貫

本配合肥料 同 一五貫

追肥 追肥用配合肥料 同 五貫

(長崎縣臨時配合肥料 第四號)

注意 施肥に當りては努めて自給肥料を施用し自給肥料の施用量、地力の肥瘠品種及栽培方法等を斟酌し必要に應じ右配合肥料の施用量其の他施用方法を適當に加減すること。尙土壤の酸性に應じ肥料用石灰一〇—二〇貫を耕起の際施用すると可い。

(二)玄武岩、洪積層地帯

(長崎縣臨時配合肥料 第二號)

適用地域 對馬島を除く各郡
土質 玄武岩、洪積層
土性 壤土、埴壤土

標準原料名稱	標準配合割合	保證(表示)成分量(百分中)
大豆粕	0.600 貫	窒素全量 7.70
鱈油粕	1.100	窒素全量 6.30
硫酸アンモニア	3.100	磷酸全量 8.20
可溶一九、七過磷酸石灰	3.800	磷酸全量 7.30
硫酸	1.300	加水全量 6.10
計	10.000	加水全量 6.10

施用方法 地力中庸本縣獎勵品種普通栽培の場合次の通り施肥する。

元肥 堆肥 反當 三〇〇貫

追肥 本配合肥料 同 一五貫
追肥用配合肥料 同 五貫

(長崎縣臨時配合肥料第四號)

注意 施肥に當りては努めて自給肥料を施用し自給肥料の施用量地力の肥瘠品種及栽培方法等を斟酌し必要に應じ右配合肥料の施用量其他施用方法を適當に加減すること。
尙土壤の酸性に應じ肥料用石灰一〇―二〇貫を耕起の際施用すると可い。

(三)砂質土地帯

(長崎縣臨時配合肥料 第三號)

適用地域 縣下一圓
土質 火山碎屑岩、沖積層、第三紀層、結晶片岩
土性 砂壤土、砂土

基準原料名稱	基準配合割合	保証(表示)成分量(百分中)
大豆粕	二、〇〇〇貫	窒素全量 八、〇〇
鯉粕	一、五〇〇	アンモニア性窒素 五、五〇
硫酸アンモニア	二、七〇〇	磷酸全量 六、〇〇
可溶一九、七過磷酸石灰	二、六〇〇	可溶性磷酸 四、九〇
硫酸	一、二〇〇	加里全量 五、八〇
計	一〇、〇〇〇	水溶性加里 五、八〇

施用方法 地力中庸種本縣獎勵品種普通栽培の場合次の通り施肥する。

元肥 堆厩肥 反當 三〇〇貫
 本配合肥料 同 一五貫
 追肥 追肥用配合肥料 同 五貫

(長崎縣臨時配合肥料 第四號)

注意 施肥に當りては努めて自給肥料を施用し、自給肥料の施用量地力の肥瘠品種及栽培方法等を斟酌し、必要に應じ右配合肥料の施用量其他施用方法を適當に加減すること。尙土壤の酸性に應じ肥料用石灰一〇—二〇貫を耕起の際施用すると可い。

(三) 本田追肥

(長崎縣臨時配合肥料 第四號)

適用地域 地域 縣下一圓
 土質 各地質
 土性 各土性

基準原料名稱	基準配合割合	保證(表示)成分量(百分中)
鱈 搾 粕	一、〇〇〇 貫	窒 素 全 量 九、〇〇
硫 酸 ア ン モ ニ ア	四、〇〇〇	ア ン モ ニ ア 性 窒 素 八、三〇
可 溶 一 六 過 磷 酸 石 灰	四、〇〇〇	磷 酸 全 量 六、九〇
硫 酸 加 里	一、〇〇〇	可 溶 性 磷 酸 六、三〇
計	一〇、〇〇〇	水 加 可 磷 窒 全 量 四、七〇

施用方法 本肥料は水稻の追肥用にして長崎縣臨時配合肥料第一號長崎縣臨時配合肥料第二號長崎縣臨時配合肥料第三號を基肥として使用したる場合に於て追肥として本配合肥料反當五貫(半叭)を施用する。

(四)石灰窒素施用の場合

適用地域 大抵の土壤は施用可なるも砂質土に於ては石灰窒素の分解困難であるから可成施用を避けること。

肥料名	反當施肥量	元肥	追肥	三成分量	施用上の注意
堆 肥	二〇〇 貫	二〇〇 貫		窒 素 二、五三 貫	一、石灰窒素は全面撒布後よく混 合して一〇—一四日間放置す ること
石 灰 窒 素	六〇	六〇		磷 酸 一、五〇〇	一、追肥は施用しないこと
硫 酸 ア ン モ ニ ア	一、五	一、五			
普 通 過 磷 酸	六〇	六〇		加 里 一、九六〇	一、硫 酸 加 里 の 代 用 と し て 草 木 灰 施 用 の 場 合 は 十 六 貫 施 用 の こ と
硫 酸 加 里	二、〇	二、〇			

(五)青刈大豆施用の場合
春播紫雲英

肥料名	反當 施肥量	元肥	追肥	三成分量	施用上の注意
青刈大豆 (紫雲英)	二〇〇貫	二〇〇貫		窒素 一、九四貫	一、青刈大豆は播種數日前に刈取り二―三切となし、二―三日日乾して後鋤込むこと
硫酸アンモニヤ	四〇〇	四〇〇		磷酸 一、五三〇	
普通過磷酸	八〇	八〇		加里 一、九三〇	一、硫酸加里の代りに草木灰を施用するときは反當一五貫施用のこと
硫酸加里	一、五	一、五			

(六)紫雲英施用の場合

肥料名	反當 施肥量	元肥	追肥	三成分量	施用上の注意
紫雲英(生)	四〇〇貫	四〇〇貫		窒素 二、二五貫	一、紫雲英は満開期に刈取り、三日程日乾して生草一〇〇貫に付肥料用石灰五貫を撒布して鋤込むこと
硫酸アンモニヤ	二、五	二、五			一、硫酸加里の代りに草木灰施用

肥料名	反當 施肥量	元肥	追肥	三成分量	施用上の注意
普通過磷酸	八〇	八〇		磷酸 一、九三〇	一、冷え易き水田には施用禁物である。
硫酸加里	一、五	一、五		加里 一、九三〇	一、紫雲英は反當四〇〇貫を限度とし過剰は他へ運ぶこと

二、陸 稻

肥料名	反當 施肥量	元肥	追肥	三成分量	施用上の注意
大豆粕	三〇貫	三〇貫		窒素 全量 六、〇五%	一、反當標準施用量
硫酸アンモニヤ	二、〇	二、〇		磷酸 全量 四、二三%	元肥、堆肥 二〇〇貫
普通過磷酸	三八	三八		可溶性磷酸 全量 六、七三%	本配合 二〇
硫酸加里	〇、七	〇、七		加里 全量 六、〇八%	追肥、硫酸 二、〇―二、五
米計	一〇、〇	一〇、〇		水溶性加里 全量 三、八六%	七月下旬―八月上旬

三、稗 麥、小 麥

(一)元 肥

一、安山岩、火山碎屑岩、第三紀層、沖積層地帯

(長崎縣臨時配合肥料 第五號麥元肥)

適用地域 地域 南高來郡、北高來郡、東彼杵郡、西彼杵郡、北松浦郡
土質 安山岩、火山碎屑岩、第三紀層、沖積層
土性 壤土、埴壤土

基準原料名稱	基準配合割合	保證(表示)成分量(百分中)
鹽 搾 粕	貫 尅 〇、八〇〇	窒 素 全 量 七、六〇
硫 酸 ア ソ モ ニ ア	三、四〇〇	ア ソ モ ニ ア 性 窒 素 六、九〇
可 溶 一 六 過 磷 酸 石 灰	四、六〇〇	磷 酸 全 量 七、九〇

硫 酸 加 里	七〇〇	可 溶 性 磷 酸	七、二〇
米 糠	五〇〇	加 里 全 量	三、三〇
計	一〇、〇〇〇	水 溶 性 加 里	三、三〇

施用方法 地力中庸本縣獎勵品種普通栽培の場合次の通り施肥する。

元 肥 堆 厩 肥 反 當 三〇〇貫
草 木 灰 同 一〇貫
本 配 合 肥 料 同 一五貫
追 肥 追 肥 用 配 合 肥 料 五—一〇貫
(長崎縣臨時配合肥料 第八號)

注意 施肥に當りては努めて自給肥料を施用し自給肥料の施用量、地力の肥瘠品種及栽培方法等を斟酌し必要に應じ右配合肥料の施用量其他施用方法を適當に加減すること。
尙土壤の酸性に應じ肥料用石灰一〇—二〇貫を耕起の際施用すると可い。

二、玄武岩、洪積層地帯

(長崎縣臨時配合肥料 第六號麥元肥)

適用地域 域 對馬島を除く各郡
土質 玄武岩、洪積層
土性 壤土、埴壤土

基準原料名稱	基準配合割合	保證(表示)成分量(百分中)
大豆粕	〇、五〇〇貫	窒素全量 七、六〇
鱈搾粕	一、〇〇〇	アンモニア性窒素 六、五〇
硫酸アンモニア	三、二〇〇	磷酸全量 八、四〇
可溶一六過磷酸石灰	四、九〇〇	可溶性磷酸 七、七〇
硫酸加里	四〇〇	加里全量 一、八〇
計	一〇、〇〇〇	水溶性加里 一、八〇

施法方用 地力中庸本縣獎勵品種普通栽培の場合次の通り施肥する。

元肥 堆厩肥 反當 三〇〇貫

草木灰 同 一五貫

本配合肥料 同 一五貫

追肥 追肥用配合肥料 五—一〇貫

(長崎縣臨時配合肥料 第八號)

注意 施肥に當りては努めて自給肥料を施用し自給肥料の施用量地力の肥瘠、品種及栽培方法等を斟酌し、必要に應じ右配合肥料の施用量其他施用方法を適當に加減すること。
尙土壤の酸性に應じ肥料用石灰一〇—二〇貫を耕起の際施用すると可い。

三、砂質土地帯

(長崎縣臨時配合肥料 第七號麥元肥)

適用地域 域 縣下一圓
土質 各地質

土性 砂壤土、砂土

基準原料名稱	基準配合割合	保証(表示)成分量(百分中)
大豆粕	貫匁 一、三〇〇	窒素全量 七、五〇
鱈搾粕	一、二〇〇	アンモニア性窒素 五、七〇
硫酸アンモニア	二、八〇〇	磷酸全量 七、一〇
可溶一六過磷酸石灰	四、〇〇〇	可溶性磷酸 六、三〇
硫酸加里	七〇〇	加里全量 三、四〇
計	一〇、〇〇〇	水溶性加里 三、四〇

施用方法 地力中庸本縣獎勵品種普通栽培の場合次の通り施用する。

元肥 堆厩肥 反當 三〇〇貫
 草木灰 同 一〇貫

本配合肥料 同 一五貫
 追肥 追肥用配合肥料 同 五—一〇貫
 (長崎縣臨時配合肥料 第八號)

注意 施肥に當りては努めて自給肥料を施用し自給肥料の施用量地力の肥瘠、品種及栽培方法を斟酌し必要に應じ右配合肥料の施用量其他施用方法を適當に加減すること。
 尙土壤の酸性に應じ肥料用石灰一〇—二〇貫を耕起の際施用すると可する。

(二) 追肥

(長崎縣臨時配合肥料 第八號麥追肥)

適用地域 地域 縣下一圓
 土質 各地質
 土性 各土性

基準原料名稱	基準配合割合	保證(表示)成分量(百分中)
鹽 搾 粕	貫外 〇、五〇〇	窒 素 全 量 六、五〇
硫 酸 ア ン モ ニ ア	三、〇〇〇	ア ン モ ニ ア 性 窒 素 六、一〇
可 溶 一 六 過 磷 酸 石 灰	五、二〇〇	磷 酸 全 量 八、七〇
硫 酸 加 里	七〇〇	可 溶 性 磷 酸 八、二〇
米 糠	五〇〇	加 里 全 量 三、三〇
計	一〇、〇〇〇	水 溶 性 加 里 三、三〇

施用方法 本肥料は麥の追肥用にして長崎縣臨時配合肥料第五號長崎縣臨時配合肥料第六號長崎縣臨時配合肥料第七號を基肥として施用したる場合に於て追肥として本配合肥料反當五貫乃至十貫(半呔乃至一呔)を施用する。

三、石灰窒素施用の場合

適用地域 縣下一圓の各土性共適用できるが砂土は石灰窒素を分解し難いから避けた方がよ

肥料名	反肥當量	元肥	追肥	三成分量	施用上の注意
堆 肥	二〇〇貫	二〇〇貫	—	窒素 二、七〇貫	一、石灰窒素は耕起前に全面撒布して耕起し、畑地は二週間放置、水田裏作の場合は直ちに畦立後、他肥料を施し播種する。
石灰窒素	六〇〇貫	六〇〇貫	—	磷酸 二、二五〇貫	一、石灰窒素採用の場合には絶対に追肥を施さること。
硫酸アンモニヤ	二、五〇貫	二、五〇貫	—	加里 一、九六〇貫	一、硫酸加里の代りに草木灰を施用する場合は一六貫使用のこと。
普通過磷酸	一〇、〇〇貫	一〇、〇〇貫	—		
硫酸加里	二、〇〇貫	二、〇〇貫	—		

第二章 雜穀標準肥料

一、大豆、小豆、落花生

肥料名	反當施用量			三要素料	施用上の注意
	元肥	追肥	肥		
堆肥	10貫			窒素 500貫	
普通過磷酸	5			磷酸 1,000	
草木灰	5			加里 1,000	
石灰	20				

二、粟、黍、蜀黍、

一、反當施肥量

肥料名	反當施肥量		追肥	三成分量	施肥上の注意
	元肥	肥			
堆肥	200貫	200貫		窒素 2,000貫	一、追肥は八月中旬
大豆粕	70	70		磷酸 1,960	一、草木灰の代りに硫酸加里施用
硫酸アンモニヤ	50	25	25	加里 2,350	の場合には反當二貫
普通過磷酸	60	60			
草木灰	110	110			

二、配合肥料

肥料名	合一 割合配	含有 成分量	施肥上の注意
大豆粕	三〇貫	窒素全量	一、反當標準施肥量
硫酸アンモニヤ	二〇	アンモニヤ性窒素	元肥 堆肥
普通過磷酸	三、五	磷酸全量	草木灰 反當
硫酸加里	〇、七	可溶性磷酸	本配合肥料
米糠	〇、八	加里全量	追肥 八月上中旬
計	一〇、〇	水溶性加里	硫 反當二、〇—二、五貫

三、蕎麥

肥料名	反當 施肥量	元肥	追肥	三成分量	施肥上の注意
堆肥	一五貫	一五貫	—	窒素 一、二五〇貫	一、人糞尿は二—三倍位に稀釋して施用すること。
人糞尿	一〇〇	五〇	五〇	磷酸 一、三五五	代用として硫酸を施用するときは二、五貫目
普通過磷酸	四	四	—	加里 一、六五〇	二、草木灰の代用として硫酸加里を施用するときは一貫目
草木灰	二〇	二〇	—	—	—

四、玉蜀黍

肥料名	反肥量	元肥	追肥	三成分量	施用上の注意
堆肥	二〇〇貫	二〇〇貫	—	窒素 一、七五〇貫	一、人糞尿の代りに硫安を施用する場合は元肥三、七五〇貫追肥三、七五〇貫を施用すること。
人糞尿	一五〇	七五	七五	磷酸 一、六七五	一、草木灰の代用として硫酸加里を使用するときは一貫目施用すること。
普通過磷酸	五	五	—	加里 二、〇五〇	一、人糞尿は二―三倍に稀釋して施用すること。
草木灰	—	一〇	—	—	—

第三章 特用作物

一、苧麻

肥料名	反肥量	元肥	追肥	三成分量	施用上の注意
堆肥	二〇〇貫	二〇〇貫	一回	窒素 九、九二〇貫	一、堆肥はよく腐熟せるものを施用すること。
大豆粕	二〇	二〇	一回	—	一、元肥は十一月下旬
大粉	二〇	二〇	一回	—	一、追肥は十一月下旬
骨粉	三〇	三〇	一回	磷酸 二、九〇〇	一、追肥は十一月下旬
硫酸加里	三	三	一回	加里 二、七四〇	一、追肥は十一月下旬
硫酸アンモニヤ	三	三	一回	—	一、追肥は十一月下旬
石灰	三	三	一回	—	一、追肥は十一月下旬

二、棉

肥料名	反當 施用量	元肥	追肥	三成分量	施用上の注意
堆肥	二〇〇貫	二〇〇貫	一回	窒素 一、四九三貫	一、追肥の時期 一回 六月中旬
種粕	五	五	一回	磷酸 一、五八五	二回 六月下旬
大豆粕	六	六	一回	加里 二、二三五	或は六月下旬一回にても可。 一、種粕の代用として大豆粕、魚肥等を使用するも可。
硫酸アンモニヤ	二	二	一回		
普通過磷酸	四	四	一回		
草木灰	五	五	一回		

三、菜種

一、反當施肥量

肥料名	反當 施用量	元肥	追肥	三成分量	施用上の注意
堆肥	二〇〇貫	二〇〇貫	一回	窒素 三、五九八貫	追肥の時期 一回 二月中旬
下肥	七〇〇貫	七〇〇貫	一回	磷酸 二、五九〇	二回 三月中下旬
大豆粕	七	七	一回	加里 二、九〇五	
硫酸アンモニヤ	三	三	一回		
普通過磷酸	八	八	一回		
草木灰	五	五	一回		

二、配合肥料
(長崎縣臨時配合肥料 第五號)

肥料名	合一 割合記	保證成分量	施肥上の注意
鑑 メ 粕	〇、八	窒素全量	反當標準施肥量 堆肥 三〇〇貫 本配合肥料 一、五呔
硫酸アンモニヤ	三、四	アンモニヤ性窒素	追肥 一回 二月中旬 臨時配合肥料第八號 〇、五—一、〇呔 (麥肥料參照)
普通過磷酸	四、六	可溶性磷酸	二回 三月中下旬 硫酸二—三貫追肥又は下 肥八〇—一二〇貫
硫酸加里	一、三	加水溶性加里	

四、薄
荷

肥料名	反當 施用量	元肥	追肥	三成分量	施用上の注意
堆肥	二〇〇貫	一貫	一回 三回 三回	窒素 四、八六貫	一、元肥は植付當時
下肥	一貫	一貫	一回 三回 三回	磷酸 二、九三〇	一、追肥の時期
大豆粕	六元	一貫	一回 三回 三回	加里 二、六三〇	一回 五月中下旬
硫酸アンモニヤ	三〇貫	三貫	一回 三回 三回		二回 一番刈取後六月中旬
普通過磷酸	三〇貫	四貫	一回 三回 三回		三回 二番刈取後(八月下旬)
草木灰	三〇貫	五貫	一回 三回 三回		

五、蘭

一、畑 苗 床 (一畝歩當)

肥料名	畝 施用量	元 肥	追 肥	三成分量	施用上の注意
大豆 粕	七貫	二五貫	三貫	八〇分	一、元肥は整地の際施用す 一、追肥の時期 一回 九月上旬頃 二回 十月上旬頃
草木 灰	五貫	五貫	三貫	四九分	
種 粕	三貫	一貫	一貫	六七分	
硫酸アンモニヤ	一貫	一貫	一貫		
普通過磷酸	一、五貫	一、五貫	一、五貫		
硫酸加里	〇、五貫	〇、五貫	〇、五貫		

二、八 月 苗 (一畝歩當)

肥料名	畝 施用量	元 肥	追 肥	三成分量	施用上の注意
下 肥	二〇貫	二貫	一回	八八分	一、追肥の時期 一回 九月下旬頃 一回 十月中旬頃
大豆 粕	六貫	四貫	三貫	五二分	
木 灰	四貫	一貫	一貫	四八分	
硫酸アンモニヤ	二貫	二貫	二貫		
普通過磷酸	二貫	二貫	二貫		

三、本圃肥料(一反歩當)

肥料名	反當 施用量	元肥			追肥			三成分量	施用上の注意
		一回	二回	三回	一回	二回	三回		
		貫	貫	貫	貫	貫	貫		
堆肥	200	—	—	—	—	—	—	—	—
大豆粕	30	—	—	—	—	—	—	—	—
硫酸アンモニヤ	30	—	—	—	—	—	—	—	—
硫酸加里	30	—	—	—	—	—	—	—	—
普通過磷酸	8	—	—	—	—	—	—	—	—
硫酸加里	8	—	—	—	—	—	—	—	—

窒素 一〇、三〇貫
 磷酸 五、三五貫
 加里 五、七〇貫
 元肥 十二月中旬
 追肥 一回 三月下旬
 一回 四月下旬
 一回 五月下旬

六、煙草

(福岡地方專賣所島原出張所による)

一、苗床肥料

(イ)元肥 (一坪當)

肥料名	數量	施用	用法
腐熟堆肥	四斗	播種當日施用ス	之等は施用二週間前混合醱酵せしめ置き播種當日施用す
細末堆肥	六斗	播種當日施用す	
草木灰	三斗	播種當日混合施用す	

(ロ)追肥

肥料名	施用時期	數量	施用	用法
細末堆肥	苗葉二、三枚の時	二合	週間前	堆肥、種粕は施用二週間前に混合醱酵せしめたるものを施用す
	苗葉四、五枚の時	二合		
	苗葉五、六枚の時	三合		
	苗葉六、七枚の時	四合		
	間引直後	四合		
	間引直後	一升		
	間引直後	一升		
種粕	—	—	—	施用當日混合施用す
薬灰	—	—	—	施用當日混合施用す

二、本圃肥料

肥料名	施用法	
	反當量	元肥
堆肥	二七貫	二〇貫
種粕	五	五
普通過磷酸	七	七
草木灰	五	五
	追肥	施用方法
	一回二回	元肥は全醱酵とし、追肥は半醱酵として施用す 堆肥種粕醱酵の際混合施用す 五施用當日混合施用す

備考

元肥は壺肥(移植當日施用)と蓋肥(移植當日又は翌日)に分ち施用し
追肥は移植後十日頃までに施用し假土寄をなす
移植(三月下旬より四月中旬頃)

七、除 蟲 菊

肥料名	反當量		追肥	三成分量	施用上の注意
	元肥	一回二回			
堆肥	二〇貫	二〇貫	一回	窒素 三、九〇貫	一、元肥は九月下旬 堆肥は整地の際撒布す
大豆粕	二〇	二〇	一回	磷酸 一、六〇〇	一、追肥の時期
硫酸アンモニヤ	八	二	一回	加里 二、二〇〇	一回 十二月中旬 二回 三月上旬
普通過磷酸	五	二	一回		
硫酸加里	二	二	一回		

八、蒟蒻芋

肥料名	反施用當量	元肥	追肥	三成分量	施用上の注意
堆肥	二〇〇貫	二〇〇貫	—	窒素 二、三九二貫	一、本肥料は三年子に對するものである
大豆粕	三	—	三	磷酸 二、〇一五	一、堆肥は單作の場合には十二月頃に撒布してよく深耕する
種粕	三	—	三	加里 三、一〇〇	一、追肥は六月上中旬土寄の際に施用す
普通過磷酸	三	—	三	—	一、早害豫防のため六月下旬青草六、七〇〇貫を敷く
木灰	二〇	—	二〇	—	一、窒素肥料の過用は病害に犯され易いから成る可く控え、磷酸、加里肥料を多く施すこと

九、桑

一、寒肥配合肥料 (長崎縣臨時配合肥料 第一四號)

肥料名	一畝配合割合	保證成分量	施肥上の注意
大豆粕	二、五〇貫	窒素 全量 七、六〇	一、反當標準施肥量
硫酸アンモニヤ	三、〇〇	アンモニヤ性窒素 六、一〇	綠肥 五〇〇貫
普通過磷酸	三、三〇	磷酸 全量 五、五〇	本配合肥料 三〇〇貫
硫酸加里	一、二〇	可溶性磷酸 五、一〇	一、各種の條件を考慮に入れて施肥量を加減すること
計	一〇、〇〇	加里 全量 五、九〇	一、冬季反當石灰二〇—三〇貫の施用をなすこと
		水溶性加里 五、九〇	

二、夏肥配合肥料
(長崎縣臨時配合肥料 第一五號)

肥料名	一畝配合割合	含有成分量	施肥上の注意
大豆 粕	一、〇〇貫	窒素 全量 八、七〇%	一、反常標準施肥量
硫酸アンモニヤ	四、〇〇	アンモニヤ性窒素 八、二〇	堆厩肥 五〇〇貫
普通過磷酸	三、五〇	磷酸 全量 五、六〇	綠肥 三〇〇貫
硫酸加里	一、五〇	可溶性磷酸 五、四〇	本配合肥料 五畝
計	一〇、〇〇	加里全量 七、二〇	一、各種の條件を斟酌して施肥量を加減すること
		水溶性加里 七、三〇	

一〇、茶

反當施肥量

肥料名	全量				反當三要素量
	基肥 (九月中旬)	春肥 (三月中旬)	追肥 (六月上旬)	追肥 (七月上旬)	
堆肥	三〇〇貫	三〇〇貫	一	一	窒素 七、二六貫
大豆 粕	二七	二〇	九	一	磷 三、四一〇
種粕	三〇	一五	四	一	磷酸 三、四一〇
硫酸普通過磷酸	三	一	一	一	加里 四、二五
硫酸加里	四〇	一五	一	一	

施用方法
 基肥 深耕後枝端直下所謂雨落を標準にして深さ五、六寸の處に施すこと
 春肥 浅耕後温暖なる日を選び三、四寸の深さに基肥に準じ施すこと
 追肥 春肥の方法に準ずるも上根を損傷せざる様注意し液肥を施すこと

第四章 蔬菜標準肥料

一、大根 (菜菔、蘿蔔)

一、反當施肥量

肥料名	反當施肥量			三成分量	施用上の注意
	元肥	追肥	肥		
堆肥	二〇〇貫	一回	三〇貫	窒素 四、三九〇貫	一、追肥の時期 一回 本葉二、三枚の頃 二回 本葉五、六枚の頃 三回 前回の二週間後
下肥	三五〇貫	一回	三〇貫	窒素 二、八九六貫	
大根	一〇〇貫	一回	三〇貫	窒素 三、二〇〇貫	
米	二〇〇貫	一回	三〇貫	加里	一、下肥はよく腐熟さし二―三倍に稀めて使用すること 二、化学肥料は品質を悪くする傾向があるから可成避けること
大豆	二〇〇貫	一回	三〇貫	加里	
糖粕	二〇〇貫	一回	三〇貫	加里	
硫酸アンモニヤ	二、五〇〇貫	一回	三〇貫	加里	(又は精過磷酸五貫) (又は硫酸加里三貫)
普通過磷酸	六〇〇貫	一回	三〇貫	加里	
草木灰	五〇〇貫	一回	三〇貫	加里	

二、配合肥料

肥料名	一畝配合割合	含有成分量		施肥上の注意
		窒素全量	アンモニヤ性窒素	
大豆粕	二、八	四、九%	一、四	一、反當標準施肥量 堆肥 二〇〇貫 下肥 二、五〇〇貫 本配合肥料 三、五〇貫
硫酸アンモニヤ	〇、七	四、八	一、四	
普通過磷酸	一、八	二、八	二、八	
米	二、八	一、九	二、六	追肥 一回 本葉二、三枚の頃 二回 本葉五、六枚の頃 三回 前回の二週間後
硫酸加里	〇、四	二、六	二、六	
水溶性加里	二、八	一、九	二、六	

二、燕が

菁が

肥料名	反施用量	元肥	追肥	三成分量	施用上の注意
堆肥	200貫	200貫	一回 1貫 二回 1貫 三回 1貫	窒素 4、250貫	一、追肥の時期 一回 本葉二、三枚の頃 二回 本葉五、六枚の頃 三回 前回の二週間後
下肥	350貫	1貫	8貫		
大豆粕	5貫	5貫			
鱈粕	5貫	5貫			
硫酸アンモニヤ	3貫	3貫		加里 3、300貫	
普通過磷酸	8貫	8貫		磷酸 2、970貫	
草木灰	20貫	20貫		（又は硫酸加里二貫）	

三、人じん

参じん (胡蘿蔔)

肥料名	反施用量	元肥	追肥	三成分量	施用上の注意
堆肥	200貫	200貫	一回 1貫 二回 1貫 三回 1貫	窒素 3、980貫	一、追肥の時期 一回 本葉の出た頃 二回 前回の二週間後 三回 前回の二週間後 以後は適宜下肥施用
下肥	300貫	1貫	100貫		
種粕	15貫	5貫		磷酸 2、650貫	
米糠	10貫	10貫		加里 3、650貫	一、種子は元肥に觸れない様に播くこと
硫酸アンモニヤ	2、5貫	2、5貫			
普通過磷酸	3、5貫	3、5貫			
草木灰	2、5貫	2、5貫		（又は精過磷酸三貫加里三貫） （又は硫酸加里三貫）	一、下肥はよく腐熟せしめ二―三倍に稀めて使用すること

四、牛蒡

は、

堆肥	下肥	大豆	大粕	鱈粕	硫酸アンモニヤ	普通過磷酸	硫酸加里	草木灰
200貫	250貫	130貫	100貫	50貫	85貫	18貫	15貫	25貫
200貫	250貫	130貫	100貫	50貫	85貫	18貫	15貫	25貫
追肥	追肥	追肥	追肥	追肥	追肥	追肥	追肥	追肥
1回	1回	1回	1回	1回	1回	1回	1回	1回
200貫	200貫	200貫	200貫	200貫	200貫	200貫	200貫	200貫
窒素 四、九六貫	磷酸 三、三〇〇貫	加里 三、九三五貫	(又は精過磷酸) 六貫					
一、追肥の時期 一回 本葉二、三枚の頃 二回 前回の二週間後								

五、里芋

芋

堆肥	下肥	大豆	大粕	米糠	硫酸アンモニヤ	普通過磷酸	草木灰
200貫	200貫	150貫	150貫	150貫	40貫	60貫	20貫
200貫	200貫	150貫	150貫	150貫	40貫	60貫	20貫
追肥	追肥	追肥	追肥	追肥	追肥	追肥	追肥
1回	1回	1回	1回	1回	1回	1回	1回
200貫	200貫	200貫	200貫	200貫	200貫	200貫	200貫
窒素 四、四八七貫	磷酸 二、九四〇貫	加里 三、六七五貫	(又は精過磷酸) 六貫	(又は硫酸加里) 五貫			
一、追肥の時期 一回 芽の出た頃 二回 本葉三枚頃 三回 前回の二、三週間後 乾燥を防ぐために有機物特に堆肥敷草等の多用はよい 一、加里肥料の適量は効果大である。							

六、春馬鈴薯

一、反當施肥量

肥料名	反當 施用量	元肥	追肥	三成分量	施用上の注意
堆肥	二〇〇貫	二〇〇貫	一回二回	窒素 三、四貫	一、追肥の時期
下豆肥	一六〇貫	一六〇貫	一回	磷酸 二、八六五	一回 發芽して三、四寸位の頃
大豆粕	五八	五八	一回	加里 三、〇五五	二回 前回の三週間後
鱈粕	三八	三八	一回		一、生育期間が短かいから可成速効性肥料を施すこと
硫酸アンモニヤ	七三	七三	一回		
普通過磷酸	二五	二五	一回		
草木灰					

二、配合肥料

肥料名	一畝配 割合	含有成分量	施肥上の注意
大豆粕	一〇貫	窒素全量 五、四%	一、反當施肥量
雜魚粕	三〇貫	アンモニヤ性窒素 二、九%	堆肥 二〇〇貫
硫酸アンモニヤ	一、四貫	磷酸全量 七、〇%	本配合肥料 三畝
普通過磷酸	三〇貫	可溶性磷酸 四、八%	追肥
硫酸加里	一、〇貫	加里全量 五、〇%	一回 發芽し三、四寸位の頃下肥六〇貫
米糠	〇、六貫	水溶性加里 四、八%	二回 前回の二週間後下肥一〇〇貫施用

七、秋馬鈴薯

一、反當施肥量

肥料名	反當 施用 量	元肥	追肥	三成分量	施用上の注意
堆肥	二〇〇貫	二〇〇貫	一回 二貫	窒素 三、〇四貫	一、追肥の時期
下肥	一六〇貫	一〇〇貫	一回 一〇〇貫	磷酸 二、四三貫	一回 發芽して三、四寸位の頃
鑑メ粕	七貫	七貫	一回 七貫	加里 二、九八貫	二回 前回の二週間後
硫酸アンモニヤ	三貫	三貫	一回 三貫	(又は精過磷酸)	一、生育期間が短かいから可成速効性肥料を施すこと
普通過磷酸	五貫	五貫	一回 五貫	(又は硫酸加里)	
草木灰	二五貫	二五貫	一回 二五貫		

二、配合肥料

肥料名	一以配 割合	含有成分量	施肥上の注意
雜魚粕	三〇貫	窒素全量 四、二%	一、反當標準施肥量
硫酸アンモニヤ	一〇貫	アンモニヤ性窒素 二、〇%	元肥 堆肥 二〇〇貫
普通過磷酸	三〇貫	磷酸全量 七、三%	本配合肥料 三貫
硫酸加里	一〇貫	可溶性磷酸 四、八%	追肥
米糠	二〇貫	加水溶性加里 四、八%	一回 發芽して三、四寸頃
			二回 下肥を三貫施用
			一回 前回の二週間後下肥
			一〇〇貫施用

八、薑しょうが

一、反當施肥量

肥料名	反當 施用量	元肥	追肥 一回 二回	三成分量	施用上の注意
堆肥	三〇〇貫	三〇〇貫	—	窒素 四、九四貫	一、追肥の時期
下肥	二〇〇貫	—	—	—	一回 五月中下旬
大豆粕	五	—	—	—	二回 六月中下旬
大麥粕	二〇	—	—	—	一、下肥の過用は辛辣を減ずるか ら注意を要す
鹽メ	三〇	—	—	—	—
硫酸アンモニヤ	三	—	—	—	—
普通過磷酸	八	—	—	—	—
草木灰	三	—	—	—	一、乾燥するから敷薬を行ふこと

二、配合肥料

肥料名	一畝配 割合	含有成分量	施肥上の注意
大豆粕	三、五貫	窒素全量 六〇%	一、反當標準施肥量
鹽メ	二、〇	アンモニヤ性窒素 二、〇	元肥 堆肥 三〇〇貫
硫酸アンモニヤ	一、〇	磷酸全量 五、四	本肥合肥料 二、五畝
普通過磷酸	二、五	可溶性磷酸 四、〇	追肥 一回 五月中下旬
硫酸加里	一、〇	加水溶性加里 四、八	二回 六月中下旬

九、玉たま

葱ねぎ
(葱頭)

一、反當施肥量

肥料名	反當施肥量		追肥			三成分量	施用上の注意
	元肥	追肥	一回	二回	三回		
堆肥	三〇〇貫	三〇〇貫	六〇貫	八〇貫	六〇貫	窒素 四、九〇貫	一、追肥の時期 一回 植付活着後 二回 三月中旬頃 三回 前回の二週間後
下肥	二〇〇貫	二〇〇貫	六〇貫	八〇貫	六〇貫	窒素 四、九〇貫	一、追肥の時期 一回 植付活着後 二回 三月中旬頃 三回 前回の二週間後
種籾	一〇〇貫	一〇〇貫	六〇貫	八〇貫	六〇貫	窒素 四、九〇貫	一、追肥の時期 一回 植付活着後 二回 三月中旬頃 三回 前回の二週間後
硫酸アンモニヤ	五〇貫	五〇貫	六〇貫	八〇貫	六〇貫	窒素 四、九〇貫	一、追肥の時期 一回 植付活着後 二回 三月中旬頃 三回 前回の二週間後
普通過磷酸	八貫	八貫	六〇貫	八〇貫	六〇貫	窒素 四、九〇貫	一、追肥の時期 一回 植付活着後 二回 三月中旬頃 三回 前回の二週間後
硫酸加里	一貫	一貫	六〇貫	八〇貫	六〇貫	窒素 四、九〇貫	一、追肥の時期 一回 植付活着後 二回 三月中旬頃 三回 前回の二週間後
草木灰	三〇貫	三〇貫	六〇貫	八〇貫	六〇貫	窒素 四、九〇貫	一、追肥の時期 一回 植付活着後 二回 三月中旬頃 三回 前回の二週間後
石灰	三〇貫	三〇貫	六〇貫	八〇貫	六〇貫	窒素 四、九〇貫	一、追肥の時期 一回 植付活着後 二回 三月中旬頃 三回 前回の二週間後

二、配合肥料

肥料名	一畝配合割合	含有成分量	施肥上の注意	
			元肥	追肥
種籾	二〇貫	窒素全量 五、二%	一、反當標準施肥量 三〇〇貫	一回 植付活着後下肥六〇貫
硫酸アンモニヤ	二〇貫	アンモニヤ性窒素 二、〇%	本配合肥料 五畝	二回 三月中旬頃下肥八〇貫
普通過磷酸	二、一	可溶性磷酸 三、三%		三回 前回の二週間後下肥六〇貫
硫酸加里	〇、九	加里全量 四、七%		
米糠	二、〇	水溶性加里 四、三%		

二〇、葱ねぎ

肥料名	反用量	元肥	追肥	三成分量	施用上の注意
堆肥	二〇〇貫	二〇〇貫	一回 一五〇貫 二回 一五〇貫	窒素 四、九三貫	一、追肥の時期 一回 八月下旬 二回 九月中下旬
大豆	三〇〇貫	三〇〇貫	一回 一五〇貫 二回 一五〇貫	窒素 四、九三貫	一、追肥の時期 一回 八月下旬 二回 九月中下旬
大下肥	三〇〇貫	三〇〇貫	一回 一五〇貫 二回 一五〇貫	窒素 四、九三貫	一、追肥の時期 一回 八月下旬 二回 九月中下旬
鱈粕	八五	八五	一回 一五〇貫 二回 一五〇貫	窒素 四、九三貫	一、追肥の時期 一回 八月下旬 二回 九月中下旬
硫酸アンモニア	八	八	一回 一五〇貫 二回 一五〇貫	窒素 四、九三貫	一、追肥の時期 一回 八月下旬 二回 九月中下旬
普通過磷酸	一八	一八	一回 一五〇貫 二回 一五〇貫	窒素 四、九三貫	一、追肥の時期 一回 八月下旬 二回 九月中下旬
硫酸加里	三〇	三〇	一回 一五〇貫 二回 一五〇貫	窒素 四、九三貫	一、追肥の時期 一回 八月下旬 二回 九月中下旬
草木灰	三〇	三〇	一回 一五〇貫 二回 一五〇貫	窒素 四、九三貫	一、追肥の時期 一回 八月下旬 二回 九月中下旬
石灰	三〇	三〇	一回 一五〇貫 二回 一五〇貫	窒素 四、九三貫	一、追肥の時期 一回 八月下旬 二回 九月中下旬

二一、長なが

芋いも (薯蕷やまのいも)

肥料名	反用量	元肥	追肥	三成分量	施用上の注意
堆肥	三〇〇貫	三〇〇貫	一回 一五〇貫 二回 一五〇貫	窒素 四、七三貫	一、追肥の時期 一回 七月下旬 二回 八月下旬
大豆	三〇〇貫	三〇〇貫	一回 一五〇貫 二回 一五〇貫	窒素 四、七三貫	一、追肥の時期 一回 七月下旬 二回 八月下旬
大下肥	三〇〇貫	三〇〇貫	一回 一五〇貫 二回 一五〇貫	窒素 四、七三貫	一、追肥の時期 一回 七月下旬 二回 八月下旬
種粕	二五	二五	一回 一五〇貫 二回 一五〇貫	窒素 四、七三貫	一、追肥の時期 一回 七月下旬 二回 八月下旬
米糠	二五	二五	一回 一五〇貫 二回 一五〇貫	窒素 四、七三貫	一、追肥の時期 一回 七月下旬 二回 八月下旬
普通過磷酸	五	五	一回 一五〇貫 二回 一五〇貫	窒素 四、七三貫	一、追肥の時期 一回 七月下旬 二回 八月下旬
硫酸加里	三	三	一回 一五〇貫 二回 一五〇貫	窒素 四、七三貫	一、追肥の時期 一回 七月下旬 二回 八月下旬
草木灰	三	三	一回 一五〇貫 二回 一五〇貫	窒素 四、七三貫	一、追肥の時期 一回 七月下旬 二回 八月下旬
石灰	三	三	一回 一五〇貫 二回 一五〇貫	窒素 四、七三貫	一、追肥の時期 一回 七月下旬 二回 八月下旬

一三、結球白菜

一、反當施肥量

肥料名	反當施肥量				三成分量	施用上の注意
	元肥	一回	二回	三回		
堆肥	300貫	1貫	1貫	1貫	窒素 6.010貫	一、追肥の時期 一回 發芽後本葉の現れた頃 二回 本葉三枚位の頃 三回 前回の二週間後 四回 前回の二週間後 以後は適宜下肥を施すこと 一、下肥はよく腐熟せしめて二 三倍に稀めて使用すること
下肥	300貫	1貫	1貫	1貫	窒素 3.700貫	
大豆粕	100貫	1貫	1貫	1貫	加里 4.950貫	
大豆粕	100貫	1貫	1貫	1貫	加里 4.950貫	
鹽メ	50貫	1貫	1貫	1貫	又(は)精過(は)酸(は)八(は)貫(は)草(は)木(は)灰(は)四(は)貫(は)五(は)貫	
硫酸アンモニヤ	50貫	1貫	1貫	1貫	又(は)精過(は)酸(は)八(は)貫(は)草(は)木(は)灰(は)四(は)貫(は)五(は)貫	
普通過磷酸	100貫	1貫	1貫	1貫	又(は)精過(は)酸(は)八(は)貫(は)草(は)木(は)灰(は)四(は)貫(は)五(は)貫	
硫酸加里	50貫	1貫	1貫	1貫	又(は)精過(は)酸(は)八(は)貫(は)草(は)木(は)灰(は)四(は)貫(は)五(は)貫	

二、配合肥料

肥料名	一以配合割合	含有成分量	施肥上の注意
大豆粕	20%	窒素全量	一、反當標準施肥量 元肥 堆肥 300貫 本配合肥料 300貫
鹽メ	20%	アンモニヤ性窒素	追肥 一回 本葉の現れた頃 6貫 二回 本葉三枚位の頃 6貫 三回 前回の二週間後 6貫 四回 前回の二週間後 6貫
硫酸アンモニヤ	15%	磷酸全量	追肥 一回 本葉の現れた頃 6貫 二回 本葉三枚位の頃 6貫 三回 前回の二週間後 6貫 四回 前回の二週間後 6貫
普通過磷酸	25%	可溶性磷酸	追肥 一回 本葉の現れた頃 6貫 二回 本葉三枚位の頃 6貫 三回 前回の二週間後 6貫 四回 前回の二週間後 6貫
硫酸加里	10%	加里全量	追肥 一回 本葉の現れた頃 6貫 二回 本葉三枚位の頃 6貫 三回 前回の二週間後 6貫 四回 前回の二週間後 6貫
米糠	12%	水溶性加里	追肥 一回 本葉の現れた頃 6貫 二回 本葉三枚位の頃 6貫 三回 前回の二週間後 6貫 四回 前回の二週間後 6貫

一三、長崎白菜、体菜、高菜

欠

二、配合肥料

肥料名	一畝配合割合	含有成分量	施用上の注意
種籾	一貫	窒素全量	一、反當標準施肥量 堆肥 三〇〇貫
種籾	二、〇	アンモニア性窒素	本配合肥料 五〇貫
種籾	一、五	磷酸全量	追肥
種籾	三、〇	可溶性磷酸	一回 活着後下肥八〇貫
普通過燐酸	〇、八	加里全量	二回 前回の二週間後下肥
硫酸加里	一、二	水溶性加里	三回 前回の二、三週間後下肥一五〇貫
米糠			以後適宜下肥を施用す

一五、花椰菜

肥料名	反當元肥	追肥	三成分量	施用上の注意
堆肥	三〇〇貫	一回 二回 三回	窒素 五、八七四貫	一、追肥の時期
下肥	四〇〇貫		磷酸 三、六五五貫	一回 活着後
大豆粕	五貫		加里 四、〇七五貫	二回 前回の二週間後
大豆粕	一〇貫			三回 前回の二—三週間後
種籾	一〇貫			以後は適宜下肥を施す
硫酸アンモニア	三貫			一、施肥の多用は根の發育を促し生育が良好になる
普通過燐酸	七貫			一、下肥の効果は特に著しい
草木灰	二〇貫			一、石灰の適量は又効果大である
石灰	二〇貫			

欠

堆肥	下肥	鱈粕	種粕	米糠	硫酸アンモニア	普通過磷酸	草木灰	石灰	
300貫	400貫	100貫	50貫	20貫	3貫	3貫	3貫	2貫	
300貫	100貫	50貫	80貫	10貫	3貫	3貫	3貫	2貫	
1貫	100貫	100貫	100貫	100貫	100貫	100貫	100貫	100貫	
1貫	100貫	100貫	100貫	100貫	100貫	100貫	100貫	100貫	
1貫	100貫	100貫	100貫	100貫	100貫	100貫	100貫	100貫	
1貫	100貫	100貫	100貫	100貫	100貫	100貫	100貫	100貫	
三成分量	窒素 六、二四貫	磷酸 三、八七〇	加里 四、八五〇						
施用上の注意	元肥は遅くとも植付一週間前に施すこと	追肥の時期は着後	一回は着後二週間後	二回は着後二週間後	三回は着後二週間後	四回は着後二週間後	以後は適宜下の肥を施用すること	下肥はよく腐熟したものを使用すること	と

堆肥	下肥	大豆粕	硫酸アンモニア	普通過磷酸	草木灰
200貫	100貫	50貫	8貫	6貫	5貫
200貫	100貫	50貫	8貫	6貫	5貫
1貫	100貫	100貫	100貫	100貫	100貫
1貫	100貫	100貫	100貫	100貫	100貫
1貫	100貫	100貫	100貫	100貫	100貫
1貫	100貫	100貫	100貫	100貫	100貫
三成分量	窒素 三、四七四貫	磷酸 二、〇〇〇	加里 二、二七五	又は精過磷酸 五貫	又は硫酸加里 二貫
施用上の注意	追肥の時期	一回 本葉五枚位の頃	二回 本葉十枚位の頃	以後は随時硫酸又は下肥を施用する	

一八、**恭草** (不斷草) 苧蒿

一九、**茄子**

欠

二、胡^ろ

瓜

一、反當施肥量

肥料名	反當施肥量		追肥			三成分量	施用上の注意
	元肥	追肥	一回	二回	三回		
堆肥	三〇〇貫	三〇〇貫	〇	〇	〇	窒素 五、六〇〇貫	一、元肥は植付一週間位前に施す
下肥	二〇〇貫	〇	〇	〇	〇	加里 三、六〇〇貫	一回肥の時後(定植五、六日)
大豆	〇	〇	〇	〇	〇	磷酸 四、二七〇貫	追肥は後(二週間後)
種粕	〇	〇	〇	〇	〇	加里 四、二七〇貫	二回は前回の二週間後
種粕	〇	〇	〇	〇	〇	加里 四、二七〇貫	三回は前回の二週間後
種粕	〇	〇	〇	〇	〇	加里 四、二七〇貫	以後は適宜下肥を追肥すること
種粕	〇	〇	〇	〇	〇	加里 四、二七〇貫	と下肥はよく腐熟したものを用いる
種粕	〇	〇	〇	〇	〇	加里 四、二七〇貫	下肥は三倍に稀めて使用する
種粕	〇	〇	〇	〇	〇	加里 四、二七〇貫	堆肥は良好にする
種粕	〇	〇	〇	〇	〇	加里 四、二七〇貫	堆肥は弱いから肥料はよく腐熟さして肥溝を切つて施用し
種粕	〇	〇	〇	〇	〇	加里 四、二七〇貫	根を傷めぬ様にすること

二、配合肥料

肥料名	一畝配合	含有成分量				施肥上の注意
		窒素全量	アンモニヤ性窒素	磷酸全量	可溶性磷酸	
大豆粕	二〇貫	六〇%	二、九	五、四	四、〇	一、反當標準施肥量
種粕	一、二		二、九	五、四	四、〇	元肥 堆肥 三〇〇貫
種粕	一、五		二、九	五、四	四、〇	本配合肥料 二、五畝
硫酸アンモニヤ	一、四		二、九	五、四	四、〇	追肥 活着後下肥六〇貫
普通過磷酸	二、五		二、九	五、四	四、〇	一回 前回の二週間後
硫酸加里	〇、八		二、九	五、四	四、〇	二回 本配合肥料 二、五畝
米糠	〇、七		二、九	五、四	四、〇	三回 下肥 六〇貫
			二、九	五、四	四、〇	以後適宜下肥追肥

欠

二三、南かほ

瓜ちや

肥料名	反施用當量	元肥	追肥	三成分量	施用上の注意
堆肥	300貫	300貫	一回 50	窒素 4、394貫	一、元肥は較築に施す
下肥	150貫	150貫	一回 50	磷酸 3、300貫	一、追肥の時期
大豆	20貫	20貫	一回 50	加里 3、540貫	一回 本葉二、三枚出た頃
メ豆	20貫	20貫	一回 50		二回 開花結實後落葉の頃
籾	30貫	30貫	一回 50		三回 前回の二週間後
硫酸アンモニヤ	30貫	30貫			一、南瓜は生育が旺盛であるから
普通過磷酸	20貫	20貫			初期に多量の窒素を施すと
硫酸加里	30貫	30貫			葉のみ繁茂して結實不良となるから注意を要す

二四、越しろ

瓜ちや

肥料名	反施用當量	元肥	追肥	三成分量	施用上の注意
堆肥	300貫	300貫	一回 80	窒素 4、874貫	一、元肥は較築に施す
下肥	300貫	300貫	一回 100	磷酸 3、470貫	一、追肥の時期
大豆	20貫	20貫	一回 100	加里 4、050貫	一回 本葉二、三枚の頃
メ豆	20貫	20貫	一回 100		二回 本葉四、五枚摘心後
籾	30貫	30貫	一回 100		三回 開花結實確實となりたる頃
硫酸アンモニヤ	30貫	30貫			以後適宜下肥を施す
普通過磷酸	20貫	20貫			一、磷酸肥料の過用は種子を充實
硫酸加里	30貫	30貫			さすから差控ねばならない

二五、胡瓜まくわ

一、反當施肥量

肥料名	反當施肥量			三成分量	施用上の注意
	元肥	追肥	肥		
堆肥	二〇〇貫	一回	二〇〇貫	窒素 四、八四貫	一、元肥は鞍葉に施す
大肥	三〇〇貫	一回	三〇〇貫	磷酸 三、六三〇貫	一、追肥の時期
大粕	五五	一回	五五	加里 四、〇二五貫	一回 本葉二、三枚の頃
種粕	五五	一回	五五		二回 本葉四、五枚摘心後
米糠	二〇	一回	二〇		三回 開花結實確実となりたる頃
硫酸アンモニア	七三	一回	七三		以後は適宜下肥を施す
普通過燐酸灰	七三	一回	七三		一、元肥には分解の際臭気を發する肥料を用ひると害蟲の誘引となるから可成避けること
草木灰	二〇	一回	二〇		
石灰	二〇	一回	二〇		

二、配合肥料

肥料名	一畝配合割合	含有成分量		施肥上の注意
		窒素全量	磷酸全量	
大豆粕	一〇貫	四、七%	一、反當標準施肥量	
大粕	一〇貫	一、六%	元肥 堆肥 本配合肥料 二〇〇貫	
種粕	二、五	五、六%	追肥 一回 本葉二、三枚の頃下	
硫酸アンモニア	〇、八	三、八%	一回 本葉四、五枚摘心後	
普通過燐酸	二、四	三、八%	二回 下肥一〇貫、五枚摘心後	
加里	〇、八	四、三%	三回 開花結實確実となりたる頃	
水溶性加里	一、五	三、八%	下本配合肥料 一、二〇貫	

二六、冬瓜、扁蒲

肥料名	反施用當量		元肥		追肥			三成分量	施用上の注意
	一回	二回	一回	二回	一回	二回	三回		
堆肥	300	300	300	300	8	100	200	窒素 4、700	一、元肥は秋葉に施す
下肥	100	100	100	100	1	100	100	磷酸 3、400	一、追肥の時期 一回 本花二、三枚の頃 二回 本葉四、五枚摘心後 三回 開花結實確実となりたる頃
大豆	100	100	100	100	1	100	100	加里 3、850	以後適宜下肥を施す
大麥	100	100	100	100	1	100	100		一、米糠は質を緊らし弾力性を與へる
米糠	100	100	100	100	1	100	100		一、下肥が多過ぎると青味を帯びる傾向がある
硫酸アンモニヤ	25	25	25	25	1	1	1		
普通過磷酸	7	7	7	7	1	1	1		
草木灰	20	20	20	20	1	1	1		
石灰	20	20	20	20	1	1	1		

二七、菜豆

肥料名	反施用當量		元肥		追肥			三成分量	施用上の注意
	一回	二回	一回	二回	一回	二回	三回		
堆肥	100	100	100	100	1	100	100	窒素 1、800	一、追肥の時期 一回 本葉二、三枚の頃 二回 開花結實して實の止つた頃
下肥	100	100	100	100	1	100	100	磷酸 2、100	一、播種に際して根瘤菌を接種するとよい
大豆	100	100	100	100	1	100	100	加里 2、370	一、酸性に對して弱いから耕起前に石灰を撒布すること
普通過磷酸	7	7	7	7	1	1	1		
草木灰	20	20	20	20	1	1	1		
石灰	20	20	20	20	1	1	1		

二八、豌豆、蠶豆

肥料名	反施肥量	元肥	追肥	三成分量	施用上の注意
堆肥	100貫	100貫	1貫	窒素 1,000貫	一、酸性を忌むから耕起前に石灰を撒布すること 一、播種するとき根瘤菌を接種するとよい
下肥	100貫	100貫	1貫	窒素 1,000貫	
普通過磷酸	70貫	70貫	1貫	磷酸 1,950貫	
草木灰	20貫	20貫	1貫	加里 2,000貫 (又は硫酸加里 2,500貫)	

二九、蓮根

肥料名	反施肥量	元肥	追肥	三成分量	施用上の注意
堆肥	100貫	100貫	1貫	窒素 5,250貫	一、元肥は植込前 一、追肥は植込後一ヶ月 一、窒素肥料の過用は病害を伴ひ易いから注意を要す 一、殊に加里肥料は必要であるから充分施すこと
大豆粕	20貫	20貫	1貫	磷酸 3,760貫	
大豆粕	20貫	20貫	1貫	加里 4,790貫	
米糠	20貫	20貫	1貫	加里 4,790貫	

三〇、莓いちご

肥料名	反施用當量	元肥	追肥	三成分量	施用上の注意
堆肥	二〇〇貫	二〇〇貫	一回	窒素 三、九八四貫	一、追肥の時期
下肥	一〇〇貫	一〇〇貫	一回	一、窒素肥料の過多は莖葉が繁茂し、病害に犯され易いから注意を要す	
鱈メ粕	一〇〇貫	一〇〇貫	一回	二、開花結實期の止つたとき	
種粕	一〇〇貫	一〇〇貫	一回		
米糠	一〇〇貫	一〇〇貫	一回		
硫酸アンモニヤ	三〇貫	三〇貫	一回	五、又は精過磷酸	
普通過磷酸	七〇貫	七〇貫	一回		
草木灰	三〇貫	三〇貫	一回		一、鱈メ粕、種粕、米糠は品質の向上を促す傾向がある

三一、欸ふ 冬ふゆ

肥料名	反施用當量	元肥	追肥	三成分量	施用上の注意
堆肥	三〇〇貫	三〇〇貫	一回	窒素 四、四八六貫	一、追肥の時期
下肥	一〇〇貫	一〇〇貫	一回	一、一回 植付活着後	
大豆粕	一〇〇貫	一〇〇貫	一回	二、二回 發芽後	
大豆粕	一〇〇貫	一〇〇貫	一回	三、有機質の多きを好む	
鱈メ粕	一〇〇貫	一〇〇貫	一回		
硫酸アンモニヤ	二五貫	二五貫	一回	四、又は精過磷酸	
普通過磷酸	五五貫	五五貫	一回	二、又は硫酸加里	
草木灰	五五貫	五五貫	一回		

三二、^{カブ} 薤

一、反當施肥量

肥料名	反當 施用量	元肥	追肥	三成分量	施用上の注意
堆肥	二〇〇貫	二〇〇貫	一貫	窒素 三、二六〇	一、追肥の時期 十二月—二月下旬
下豆肥	一〇〇	一〇〇	一〇〇	磷酸 二、四四五	一、薤は其の生育甚だ強健で吸肥力旺盛であるから餘り窒素過多に陥らぬ様に注意をせねばならない
大豆粕	一〇〇	一〇〇	一〇〇	加里 二、九五〇	一、收量品質を望むには加里及磷酸肥料を相當多量施用する必要がある
硫酸アンモニヤ	五	五	一	又五貫精過磷酸	
普通過磷酸	七	七	一	又五貫加里	
草木灰	二五	二五	一	又三貫加里	

二、配合肥料

肥料名	一以配 割合	含有成分量	施用上の注意
大豆粕	二、五貫	窒素全量 六、六%	一、反當標準施肥量
硫酸アンモニヤ	二、四	アンモニヤ性窒素 四、九	元肥 堆肥 二〇〇貫
普通過磷酸	三、四	磷酸全量 六、〇	本配合肥料 二、五貫
硫酸加里	一、二	可溶性磷酸 五、四	追肥
米糠	〇、五	加里全量 六、一	十二月—二月下旬
		水溶性加里 五、七	下肥 一〇〇貫

三三、蕃^ゴ

椒^ガ

肥料名	反施用量	元肥	追肥	三成分量	施用上の注意
堆肥	二〇〇貫	二〇〇貫	一回 一〇貫	窒素 五、〇一〇貫	一、追肥の時期 一回 定植活着後 二回 結實後 以後適宜下肥を施用すること 一、窒素肥料の過用は莖葉が軟弱に育つから注意を要す
大豆粕	一五〇貫	一五〇貫	一回 一〇貫	磷酸 三、七二五貫	
大豆粕	一五〇貫	一五〇貫	一回 一〇貫	加里 四、一九五貫	
米糠	一〇〇貫	一〇〇貫	一回 一〇貫	又(八貫)は精過磷酸	
普通過磷酸	一〇〇貫	一〇〇貫	一回 一〇貫	又(二貫)は草木灰	
硫酸アンモニヤ	一〇〇貫	一〇〇貫	一回 一〇貫		

三四、土^ツ當^ツ歸^ツ

肥料名	反施用量	元肥	追肥	三成分量	施用上の注意
堆肥	四〇〇貫	四〇〇貫	一回 一〇貫	窒素 五、九九〇貫	一、本肥料は二、三年生用で二、三年までは本肥料に準じ適宜加減すること 一、元肥は定植前に施用す 一、追肥は五月中旬に施用す 一、窒素肥料の過用は莖葉を繁茂せしめ、風害を受け易し
大豆粕	二〇〇貫	二〇〇貫	一回 一〇貫	磷酸 三、九九〇貫	
大豆粕	二〇〇貫	二〇〇貫	一回 一〇貫	加里 四、〇〇〇貫	
米糠	二〇〇貫	二〇〇貫	一回 一〇貫	又(五貫)は精過磷酸	
普通過磷酸	二〇〇貫	二〇〇貫	一回 一〇貫	又(二貫)は硫酸加里	
硫酸アンモニヤ	二〇〇貫	二〇〇貫	一回 一〇貫		

三五、石ノ^{アス} ^{バラ} 柏^{ガス} (まつばうど)

肥料名	反施用當量	元肥	追肥	三成分量	施用上の注意
堆肥	六〇〇貫	六〇〇貫	一貫	窒素 六、七〇貫	一、本肥料は四、五年生用で四、五年までは本肥料に準じ適宜加減すること 一、元肥は芽出に二月中旬頃施用す 一、追肥は收穫後莖葉の繁茂前(六日頃)に施用す
下肥	三〇〇貫	一貫	三〇〇貫	磷酸 四、一〇〇貫	
大豆粕	三貫	三貫	一貫	加里 四、四二五貫	
普通過磷酸	一〇貫	一〇貫	八貫	(又は精過磷酸)	

三六、塘^{セル} 高^リ

肥料名	反施用當量	元肥	追肥	三成分量	施用上の注意
堆肥	三〇〇貫	三〇〇貫	一回一回	窒素 四、三〇貫	一、元肥は定植前(中月中旬) 一、追肥の時期 一回 活着後 二回 九月上旬 三回 軟白前(十月上旬頃適宜窒素肥料を施用すること 一、窒素肥料の過用は病害に犯され易いから注意を要す
大豆粕	二〇貫	二〇貫	一回一回	磷酸 三、四〇〇貫	
種粕	一〇貫	一〇貫	一回一回	加里 三、一〇〇貫	
硫酸アンモニヤ	五貫	一貫	二、五貫	(又は精過磷酸)	

肥料名	反施用當	元肥	追肥	三成分量	施用上の注意
堆肥	五〇〇貫	五〇〇貫		窒素 五、三五〇	
下肥	二〇〇	二〇〇		磷酸 三、九四〇	
大豆	二五	二五		加里 四、八七五	
米	二〇	二〇			
普通	六	六			
草木灰	二〇	二〇			

三八、
筍 たけのこ

肥料名	反施用當	元肥	追肥	三成分量	施用上の注意
堆肥	三〇〇貫	三〇〇貫	貫	窒素 三、六二〇	一、追肥は發芽初めに施用す
下肥	三〇〇	一五〇	一五〇	磷酸 一、七〇〇	
大豆	一〇	一〇		加里 四、〇五〇	
草木灰	二五	二五			

三七、
慈 くろ

姑 い

三九、野蜀葵

肥料名	反施用當量	元肥	追肥	三成分量	施用上の注意
堆肥	100貫	100貫	一回	窒素 三、二四貫	一、追肥の時期 一回 發芽後二週間 二回以後は生育状況を見て下肥を追肥す 一、下肥はよく腐熟せるものを二、三倍に稀めて使用すること
下肥	100貫	100貫	一回	窒素 三、二四貫	
大豆	100貫	100貫	一回	窒素 三、二四貫	
糖粕	100貫	100貫	一回	窒素 三、二四貫	
米糠	100貫	100貫	一回	窒素 三、二四貫	
硫酸アンモニヤ	100貫	100貫	一回	窒素 三、二四貫	
普通過磷酸	100貫	100貫	一回	磷酸 二、〇五〇貫	
草木灰	100貫	100貫	一回	加里 一、八七五貫	

四〇、茗荷

肥料名	反施用當量	元肥	追肥	三成分量	施用上の注意
堆肥	200貫	200貫	一回	窒素 三、四六貫	一、追肥の時期 一回 發芽後二週間
下肥	200貫	200貫	一回	窒素 三、四六貫	
盤肥	200貫	200貫	一回	窒素 三、四六貫	
メ粕	200貫	200貫	一回	窒素 三、四六貫	
硫酸アンモニヤ	200貫	200貫	一回	窒素 三、四六貫	
普通過磷酸	200貫	200貫	一回	磷酸 一、八二〇貫	
草木灰	200貫	200貫	一回	加里 一、九〇〇貫	

四一、百合根

一、反當施肥量

肥料名	反當 施用量	元肥	追肥	三成分量	施用上の注意
大豆 粕	二貫	二貫	二貫	窒素 七、二〇〇貫	一、追肥の時期 二月中旬頃
鱈メ 粕	二〇	二〇	二〇	磷酸 四、五〇〇	一、四月上旬硫酸の適量追肥は効 果大である
硫酸アンモニヤ	二〇	二〇	二〇	加里 三、一八〇	一、堆肥の施用は望ましく土龍 <small>つらら</small> の 被害のない處は施用を奨む
普通過磷酸	二〇	二〇	二〇	(又は精過磷酸) 一六貫	
硫酸加里	六	三	三	(又は草木灰五) 〇貫	

二、配合肥料

(長崎縣臨時配合肥料 第十二號)

肥料名	一畝配 割合	保證成分量	施肥上の注意
大豆 粕	二、〇貫	窒素 全量 七、〇%	一、反當標準施肥量
鱈メ 粕	二、〇	アンモニヤ性窒素 四、〇	元肥 堆肥 三〇〇貫
硫酸アンモニヤ	二、〇	磷酸 全量 六、六	本配合肥料 五畝
普通過磷酸	三、四	可溶性磷酸 五、三	追肥 二月上旬
硫酸加里	〇、六	加里 全量 三、〇	本配合肥料 五畝
		水溶性加里 三、〇	

第五章 蔬菜促成栽培標準肥料

一、胡瓜

肥料名	種 粕	普通過磷酸	木 灰
一床當 施肥量	五〇〇 匁	二〇〇	三〇〇
元 肥	二〇〇 匁	二〇〇	三〇〇
追 肥	三〇〇 匁		
一床當三成分量 (四尺×二尺)	窒素 七〇 匁	磷酸 三〇 匁	加里 三〇 匁
施用上の注意	一、追肥の回数 種粕をよく腐熟さし四―五回 に追肥す 一、種粕一升(約二三四匁)を水四 一五升と一處によく腐熟さす		

二、茄子

肥料名	種 粕	普通過磷酸	草 木 灰
一床當 施肥量	五〇〇 匁	八〇	三〇〇
元 肥	三〇〇 匁	八〇	三〇〇
追 肥	二〇〇 匁		
一床當三成分量 (四尺×二尺)	窒素 七〇 匁	磷酸 三〇 匁	加里 三〇 匁
施用上の注意	一、追肥の回数 種粕はよく腐熟せしめて液肥 となし適宜の下肥と共に生育 状況により四、五回追肥す 一、種粕を液肥にするには水四― 五升に種粕一升(約二三四匁) を加へてよく腐熟さす		

三、蕃 茄

種 粕	普通過磷酸	木 灰	肥料名
三〇〇 匁	一五〇	四〇〇	一床當 施肥量
二五〇 匁			元 肥
二五〇 匁			追 肥
窒素 六〇 匁	磷酸 四〇	加里 三〇	一床當三成分量 (四尺×二尺)
一、追肥の回数 種粕を液肥となし生育状況に より四回位追肥す 二、種粕の液肥の作り方は茄子の 項参照されし			施用上の注意

四、マスキメロン

種 粕	鍊 粕	骨 粉	普通過磷酸	木 灰	石 灰	肥料名
三〇〇 匁	三〇	三〇	二五	四〇	四〇	一株當 施肥量
二五〇 匁	三〇	三〇	二五	四〇	四〇	元 肥
適宜	適宜	少量				追 肥
元 肥 三〇 匁	窒素 五〇	磷酸 八〇	加里 五〇			三成分量
一、追肥は鍊粕及種粕の液肥を三 一五回過磷酸少量 二、粕類の液肥の作り方は茄子の 項参照のこと						施用上の注意

五、西さい

瓜くわ

肥料名	種粕	棘メ粕	普通過磷酸	木灰
一床當 施肥量	200 匁	100	200	200
元肥	200 匁	100	200	200
追肥	液肥 適宜	液肥 適宜		
一床當三成分量 (四尺×二尺)	元肥 200 匁	窒素 200 磷酸 200 加里 200	加里 200	
施用上の注意	一、追肥の回数 棘メ粕及種粕の液肥を生育状況により三、四回追肥す 一、粕類の液肥の作り方は茄子の項参照のこと			

六、南みなみ

瓜くわ

肥料名	種粕	普通過磷酸	木灰
一床當 施肥量	200 匁	200	200
元肥	200 匁	200	200
追肥	200 匁		
一床當三成分量 (四尺×二尺)	窒素 200 磷酸 200 加里 200	加里 200	
施用上の注意	一、追肥の回数 種粕の液肥を三回位追肥する 一、種粕の液肥の作り方は茄子の項参照のこと		

七、越しり

瓜うり

肥料名	種 粕	普通過 磷酸	木 灰
一床當 施肥量	五〇 <small>匁</small>	二〇〇	三〇〇
元肥	二〇 <small>匁</small>	二〇〇	三〇〇
追肥	三〇 <small>匁</small>		
一床當三成分量 (四尺×二二尺)	窒素 二七 <small>匁</small>	磷酸 五	加里 三
施用上の注意	一、追肥の回数 種粕の液肥を生育状況により 三回位追肥す 三、種粕の液肥の作り方は茄子の 項参照のこと		

八、冬ふゆ

瓜うり

肥料名	種 粕	普通過 磷酸	木 灰
一床當 施肥量	二五〇 <small>匁</small>	一五〇	三〇〇
元肥	一〇〇 <small>匁</small>		
追肥	一五〇 <small>匁</small>		
一床當三成分量 (四尺×二二尺)	窒素 四〇 <small>匁</small>	磷酸 五	加里 三
施用上の注意	一、追肥の回数 種粕の液肥を生育状況により 三回程追肥す 三、種粕の液肥の作り方は茄子の 項参照のこと		

九、蕃^{ごう}

椒^{からし}

種	普通過磷酸	木灰
肥料名	種	木灰
一床當 施肥量	二五〇 外	二五〇
元肥	二〇〇 外	二五〇
追肥	二五〇 外	
一床當三成分量 (四尺×二二尺)	窒素 三元 外	加里 三三
施用上の注意	一、追肥の回数 種粕の液肥を生育状況により 三回位追肥す 二、種粕の液肥の作り方は茄子の 項参照のこと	

一〇、莓^{いばら}

種	普通過磷酸	草木灰
肥料名	種	草木灰
一床當 施肥量	四〇〇 外	一〇〇
元肥	二五〇 外	一〇〇
追肥	二五〇 外	
一床當三成分量 (四尺×二二尺)	窒素 三元 外	加里 二〇
施用上の注意	一、追肥の回数 種粕の液肥を生育状況により 二回位追肥す 二、種粕の液肥の作り方は茄子の 項参照のこと	

一、菜いん

豆けん

肥料名	種	普通過磷酸	木
施一床當 肥量	少 量	一五〇	三〇〇
元肥	追肥	一五〇	三〇〇
追肥	少量	一	一
一床當三成分量 (四尺×二二尺)	窒素	磷酸	加里
	一 匁	三	七
施用上の注意	一、追肥 種粕を少量宛二回位に追肥す		

一、鶉かひ

豆まめ

肥料名	種	普通過磷酸	草
施一床當 肥量	二〇〇 匁	一〇〇	五〇〇
元肥	追肥	一	五〇〇
追肥	少量	一〇〇	一
一床當三成分量 (四尺×二二尺)	窒素	磷酸	加里
	二 匁	三	三
施用上の注意	一、追肥の回数 二回		

一三、葛

葛

肥料名	種	木
一床當 施肥量	粕	灰
元肥	二〇外	二五〇
追肥	二〇外	二五〇
一床當三成分量 (四尺×二二尺)	窒素 一外	加里 一
施用上の注意	追肥の回数 硫酸を水に溶解して二―三回 追肥す	二四 九 二五外

一四、山

椒

肥料名	種	粕
一床當 施肥量	粕	粕
元肥	不要	不要
追肥	少量	少量
一床當三成分量 (四尺×二二尺)	窒素 一	加里 一
施用上の注意	追肥は種粕の液肥を稀めて一 ―二回施す 種粕の液肥の作り方は水四 ―五升に種粕一升を入れてよく 腐熟させること	一 一 一

一五、紫

蘇

肥料名	種	木
一床當 施肥量	粕	灰
元肥	殆んど 不要	不要
追肥	―	―
一床當三成分量 (四尺×二二尺)	窒素 ―	加里 ―
施用上の注意	―	―

一六、白

辛

肥料名	一床當 施肥量	元肥	追肥	一床當三成分量 (四尺×二尺)	施用上の注意
種粕	五〇	五〇	少量	窒素 七	一、追肥は下肥又は種粕の液肥を 二、三回施す
普通過磷酸	五〇	五〇	少量	磷酸 二五	一、種粕の液肥は茄子の項参照の こと
草木灰	二〇〇	二〇〇	少量	加里 一七	

第六章 果樹標準肥料
一、柑 橘

一、反當施肥料 (反當六〇本植)

樹令	堆肥	下肥	大豆粕	鱈ノ粕	骨粉	硫酸	普通過磷酸	硫酸加里	反當成分量
初年	二〇〇貫	三〇貫	二貫	一貫	一貫	一、五貫	三貫	〇、五貫	窒素 一、五八六貫 磷酸 一、二四五貫 加里 一、三六四貫
二年	二〇〇貫	三〇貫	四貫	一貫	一貫	二、〇貫	三貫	〇、八貫	窒素 一、八二四貫 磷酸 一、四九五貫 加里 一、五三四貫
三年	二〇〇貫	三〇貫	六貫	一貫	一貫	二、五貫	三貫	一、五貫	窒素 二、五二二貫 磷酸 二、一九八貫 加里 二、二二〇貫
四年	三〇〇貫	五〇貫	一〇貫	一貫	一貫	四、〇貫	三貫	五、〇貫	窒素 三、九四〇貫 磷酸 三、九四〇貫 加里 四、二〇〇貫
五年	四〇〇貫	一〇〇貫	一五貫	一貫	一貫	六、〇貫	三貫	八、〇貫	窒素 六、二八〇貫 磷酸 六、三六五貫 加里 六、三六五貫
六、七、八、九、一〇、一一年	四〇〇貫	一〇〇貫	二〇貫	一貫	一貫	八、〇貫	三貫	一〇、〇貫	窒素 八、三七〇貫 磷酸 八、三七〇貫 加里 八、三七一〇貫
一二年	四〇〇貫	一〇〇貫	二五貫	一貫	一貫	一〇、〇貫	三貫	一四、〇貫	窒素 九、四〇四貫 磷酸 九、三八〇貫 加里 九、五四五貫
一三年	四〇〇貫	一〇〇貫	三〇貫	一貫	一貫	一三、〇貫	三貫	一六、五貫	窒素 一〇、四七〇貫 磷酸 一〇、三八〇貫 加里 一〇、七四五貫
一四年	四〇〇貫	一〇〇貫	三五貫	一貫	一貫	一五、〇貫	三貫	二〇、〇貫	
一五年	四〇〇貫	一〇〇貫	四〇貫	一貫	一貫	一八、〇貫	三貫	二四、〇貫	
一六年	四〇〇貫	一〇〇貫	四五貫	一貫	一貫	二〇、〇貫	三貫	二八、〇貫	
一七年	四〇〇貫	一〇〇貫	五〇貫	一貫	一貫	二二、〇貫	三貫	三二、〇貫	
一八年	四〇〇貫	一〇〇貫	五五貫	一貫	一貫	二四、〇貫	三貫	三六、〇貫	
一十九年	四〇〇貫	一〇〇貫	六〇貫	一貫	一貫	二六、〇貫	三貫	四〇、〇貫	
二十年	四〇〇貫	一〇〇貫	六五貫	一貫	一貫	二八、〇貫	三貫	四四、〇貫	
二十一年	四〇〇貫	一〇〇貫	七〇貫	一貫	一貫	三〇、〇貫	三貫	四八、〇貫	
二十二年	四〇〇貫	一〇〇貫	七五貫	一貫	一貫	三二、〇貫	三貫	五二、〇貫	
二十三年	四〇〇貫	一〇〇貫	八〇貫	一貫	一貫	三四、〇貫	三貫	五六、〇貫	
二十四年	四〇〇貫	一〇〇貫	八五貫	一貫	一貫	三六、〇貫	三貫	六〇、〇貫	
二十五年	四〇〇貫	一〇〇貫	九〇貫	一貫	一貫	三八、〇貫	三貫	六四、〇貫	
二十六年	四〇〇貫	一〇〇貫	九五貫	一貫	一貫	四〇、〇貫	三貫	六八、〇貫	
二十七年	四〇〇貫	一〇〇貫	一〇〇貫	一貫	一貫	四二、〇貫	三貫	七二、〇貫	
二十八年	四〇〇貫	一〇〇貫	一〇五貫	一貫	一貫	四四、〇貫	三貫	七六、〇貫	
二十九年	四〇〇貫	一〇〇貫	一一〇貫	一貫	一貫	四六、〇貫	三貫	八〇、〇貫	
三十年	四〇〇貫	一〇〇貫	一一五貫	一貫	一貫	四八、〇貫	三貫	八四、〇貫	
三十年以上	四〇〇貫	一〇〇貫	一二〇貫	一貫	一貫	五〇、〇貫	三貫	八八、〇貫	

(一)秋 肥 (十一月下旬—十二月上旬)

樹令	肥料	堆肥	下肥	大豆粕	鱧ノ粕	骨粉	硫安	過普 磷酸通	加硫 里酸
初年		二〇〇貫	二五貫	二〇貫	二〇貫	一貫	〇、八貫	一、五貫	〇、三貫
二—三年		二〇〇貫	二五貫	二〇貫	二〇貫	一貫	一、〇貫	二、五貫	〇、四貫
四—五年		二五〇貫	二〇貫	二〇貫	二、四貫	一、二貫	一、〇貫	一、二貫	〇、四貫
七—八年		三〇〇貫	二〇貫	四、〇貫	六、〇貫	三、二貫	一、六貫	四、〇貫	一、三貫
一〇—一五年		四〇〇貫	四〇貫	六、〇貫	八、〇貫	四、〇貫	二、四貫	四、八貫	二、〇貫
一六—二〇年		四〇〇貫	六〇貫	八、〇貫	八、〇貫	四、八貫	四、二貫	八、〇貫	三、〇貫
二一—二五年		四〇〇貫	六〇貫	八、〇貫	八、〇貫	六、〇貫	五、二貫	八、八貫	三、五貫
二五年以上		四〇〇貫	六〇貫	一〇、〇貫	一〇、〇貫	八、〇貫	六、〇貫	八、八貫	四、二貫

(二)春 肥 (二月下旬—三月上旬)

樹令	肥料	下肥	大豆粕	鱧ノ粕	骨粉	硫安	過普 磷酸通	加硫 里酸
初年		二五貫	二〇貫	一貫	一貫	〇、七貫	一、五貫	〇、二貫
二—三年		二五貫	二〇貫	一貫	一、二貫	一、〇貫	二、五貫	〇、四貫
四—五年		二〇貫	二、四貫	一貫	二、〇貫	一、〇貫	一、二貫	〇、四貫
七—八年		二〇貫	四、〇貫	三、二貫	二、〇貫	一、六貫	四、〇貫	一、三貫
一〇—一五年		四〇貫	六、〇貫	六、〇貫	四、〇貫	二、四貫	四、八貫	二、〇貫
一六—二〇年		六〇貫	八、〇貫	八、〇貫	四、八貫	四、二貫	八、〇貫	三、〇貫
二一—二五年		六〇貫	八、〇貫	八、〇貫	六、〇貫	五、二貫	八、八貫	三、五貫
二五年以上		六〇貫	一〇、〇貫	一〇、〇貫	八、〇貫	六、〇貫	八、八貫	四、二貫

(三)追

肥 (六月下旬—七月上旬)

樹令	肥料						
	下肥	大豆粕	鱈ノ粕	骨粉	硫安	普通過磷酸	加硫里酸
初年	1貫	1貫	1貫	1貫	1貫	1貫	1貫
二二年	1貫	1貫	1貫	1貫	1貫	1貫	1貫
四五年	1貫	1貫	1貫	1貫	1貫	1貫	1貫
七八年	1貫	1貫	1貫	1貫	1貫	1貫	1貫
一〇一五年	1貫	1貫	1貫	1貫	1貫	1貫	1貫
一六一二〇年	1貫	1貫	1貫	1貫	1貫	1貫	1貫
二一—二五年	1貫	1貫	1貫	1貫	1貫	1貫	1貫
二五年以上	1貫	1貫	1貫	1貫	1貫	1貫	1貫

施肥上の注意

- 一、本表は必ずしも一定不變のものではない、從來の施肥の慣行から土質、樹勢、結果量等を考慮に入れて最も適當した肥料の施用量決定の基礎とせられたい。
- 一、施用量は右表以上となるも差支なく綠肥(特にルービン)堆肥等は努めて施用する様にし、就中堆肥は標準量以下とならない様に注意しなければならない。
- 一、右表の秋肥、春肥、追肥の分け方は標準を示したもので本年及次年の結果量を斟酌し、一般に次年の結果量の少いことを豫想する場合は秋に多く然らざる場合は春に多く施用する。
- 一、肥料の施用法は各樹令共撒肥とすること。
- 一、春肥施用の際肥料用石灰を土性により異なるも二〇—三〇貫全園に撒布し深耕をなしてよく混和に努めること。

二、成木用配合肥料

(長崎縣臨時配合肥料 第一〇號)

肥料名	一畝配合割合	保證成分量	施肥上の注意
大豆粕	一、〇〇貫	窒素全量 八、〇〇%	一、反當標準施肥量 秋肥 堆肥 三〇〇貫 春肥 本配合肥料 五畝
鱈メ粕	二、〇〇	アンモニヤ性窒素 五、七〇	一、施肥量は地力、樹令、栽培方法を考慮に入れて加減する
硫酸アンモニヤ	二、八〇	磷酸全量 五、三〇	一、酸性に應じ石灰二〇―三〇貫を冬季耕起前に撒布すること
普通過磷酸	二、七〇	可溶性磷酸 四、一〇	
硫酸加里	一、五〇	加里全量 七、二〇	
計	一〇、〇〇	水溶性加里 七、二〇	

三、幼木用配合肥料

(長崎縣臨時配合肥料 第一一號)

肥料名	一畝配合割合	含有成分量	施肥上の注意
大豆粕	二、〇〇貫	窒素全量 八、七〇%	一、反當標準施肥量 四年生までは 三〇〇貫 五年本配合肥料 二一三畝
鱈メ粕	〇、五	アンモニヤ性窒素 七、一〇	五年本配合肥料 三三〇貫
硫酸アンモニヤ	三、五	磷酸全量 五、二〇	五年本配合肥料 三三〇貫
普通過磷酸	三、〇	可溶性磷酸 四、六〇	五年本配合肥料 三三〇貫
硫酸加里	一、〇	加里全量 四、九〇	一、施肥量は地力品種、樹令栽培方法を考慮に入れて加減する
計	一〇、〇	水溶性加里 四、九〇	

二、枇 杷

一、反當施肥量（反當四〇本植）

樹令	肥料		堆肥	下肥	米糠	鱧ノ粕	種粕	普通磷酸	加硫里酸	反當成分量	
	堆肥	下肥								窒素	磷酸
一	〇	〇	六	〇	〇	〇	〇	一、〇	〇、四	一、二	七、五
三	八	〇	八	〇	〇	〇	〇	二、〇	二、〇	二、〇	一、四
五	六	〇	一〇〇	〇	〇	〇	〇	三、五	二、〇	二、八	〇、五
七	八	〇	二〇〇	〇	〇	〇	〇	四、〇	二、五	三、六	二、〇
一〇	〇	〇	二〇〇	〇	〇	〇	〇	五、〇	三、〇	四、一	二、八
一三	〇	〇	二〇〇	〇	〇	〇	〇	六、〇	三、〇	四、七	三、〇
一五	〇	〇	二〇〇	〇	〇	〇	〇	七、〇	三、五	四、九	三、五

二、元

肥（六月下旬七月上旬果實採收後）

樹令	肥料		堆肥	下肥	米糠	鱧ノ粕	種粕	普通磷酸	加硫里酸
	堆肥	下肥							
一	〇	〇	一	〇	〇	〇	〇	一、四	〇、八
三	四	〇	一〇〇	〇	〇	〇	〇	一、六	〇、八
五	六	〇	二〇〇	〇	〇	〇	〇	二、〇	一、〇
七	八	〇	二〇〇	〇	〇	〇	〇	二、四	一、二
一〇	〇	〇	二〇〇	〇	〇	〇	〇	二、八	一、四
一三	〇	〇	二〇〇	〇	〇	〇	〇	三、〇	一、六
一五	〇	〇	二〇〇	〇	〇	〇	〇	三、五	一、八

備考 施肥法は輪肥又は條肥とする

三、第一回追肥（九月中、下旬）

樹令	肥料		堆肥	下肥	米糠	鱧ノ粕	種粕	過普 磷酸通	加硫 里酸
	年	年							
一	一	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
三	三	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
五	五	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
七	七	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
三	三	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
一	一	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇

備考 九月の追肥は撒肥とする

四、第二回追肥（二月中下旬）

樹令	肥料		下肥	米糠	鱧ノ粕	種粕	過普 磷酸通	加硫 里酸
	年	年						
一	一	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇
三	三	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇
五	五	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇
七	七	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇
三	三	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇
一	一	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇

備考 施肥法は撒肥とする

三、梨

(反當 七十五本植)

樹令	肥料	堆肥	大豆粕	鱈ノ粕	硫安	普通磷酸	加硫里酸	反當成分量	
								窒素	磷酸
初年		二〇〇貫	三貫	一貫	二、〇貫	三貫	一、〇貫	一、六〇二貫	一、一五〇貫
三—四年		二五〇貫	五貫	三貫	三、〇貫	六貫	二、〇貫	二、四五四貫	一、九六〇貫
五—六年		三〇〇貫	一〇貫	五貫	四、五貫	二貫	三、五貫	三、五〇六貫	三、三三〇貫
七—八年		三〇〇貫	一五貫	一〇貫	七、〇貫	二〇貫	七、〇貫	四、七八六貫	四、八五〇貫
一〇年		四〇〇貫	一七貫	一四貫	八、〇貫	二四貫	八、〇貫	五、九六二貫	六、〇三〇貫
一一—一三年		四〇〇貫	二貫	一七貫	一〇、〇貫	三〇貫	一〇、五貫	七、〇三六貫	七、二三〇貫
一五年		四〇〇貫	二五貫	二〇貫	一二、〇貫	三四貫	一二、五貫	七、八四六貫	八、〇六〇貫
									八、三七五貫

施用上の注意

- 一、肥料は土質、樹勢、樹令、結果量等に應じて施用することが大切で右表は其の標準を示したものであるから各種の條件を考慮して加減しなければならない。
- 一、大體右表の肥料は元肥として二月中下旬に施用する。
- 追肥は速效性のものを樹勢樹令に應じ適量を中生は六月上中旬、晩生は七月上中旬に施用する。尙禮肥として果實採收後に一ヶ年分の一—二割施用すると尙更よい。
- 一、肥料用石灰反當一〇—二〇貫を早春耕耘前に一面に撒布しよく耕耘して置くとよい。

四、柿

(反當四〇本植)

樹令	肥料		堆肥	大豆粕	鱈ノ粕	硫安	普通過磷酸	加硫里酸	反當成分量		
	窒素	磷酸							加里	加里	加里
初年	二〇〇	三貫	二〇〇	三貫	一貫	二〇	三貫	一、〇	一、六〇	一、二五	一、五五
三—四年	二五〇	三貫	三〇〇	三貫	二貫	二〇	五貫	一、五	二、〇〇	一、七〇	二、〇五
五—六年	三〇〇	六貫	三〇〇	六貫	二貫	二〇	八貫	三、五	二、六四	二、三〇	三、〇〇
七—八年	四〇〇	一〇貫	四〇〇	一〇貫	三貫	三、五	一四貫	四、〇	三、八三	三、九六	四、〇七
一〇年	四〇〇	一五貫	四〇〇	一五貫	三貫	四、〇	一八貫	六、〇	四、八四	四、九二	五、一〇
一一—一三年	四〇〇	二〇貫	四〇〇	二〇貫	三貫	四、五	二三貫	七、五	五、五三	五、七八	五、九〇
一五年	四〇〇	二四貫	四〇〇	二四貫	三貫	五、〇	二四貫	八、五	六、一四	六、三〇	六、四〇

施用上の注意

- 一、柿は乾濕の差の著しい土壤は柿果の肥大を妨げたり、落果を見ることがあるから保水力強く地下水の低い滯水しない埴土がよい、
- 一、所要養分を施用することは勿論であるが、速効性肥料に多く傾くと落果を助長する傾向があるから速効性の有機質肥料を多く施用するがよい、故に蠶豆、青刈大豆等の間作は最も望ましい。
- 一、右表のものは元肥として二月下旬から三月上旬までに施用し、八—九月頃少量の速効性を施す程度とする、綠肥は五—六月頃翻込む、之の際生草一〇〇貫に對し石灰を五貫每位施用する、堆厩肥は冬季間に施用するがよい。
- 一、肥料は幼木ときは輪肥とし成木では條肥又は撒肥とする。
- 一、適宜の石灰の施用は結果を増し、着色を良好にする。

五、桃

(反當五〇本植)

樹令	肥料		堆肥		大豆粕		鱈ノ粕		硫安		普通過磷酸		加硫里酸		反當成分量	
	年	年	貫	貫	貫	貫	貫	貫	貫	貫	貫	貫	貫	貫	貫	貫
一〇年	一〇年	一〇年	二〇〇	一三〇	二〇〇	四、〇	二、五	一、〇	三、八〇八	三、四四三	四、〇七五	一、三六〇	〇、九二八	一、〇五五	一、三六〇	〇、九二八
七—八年	七—八年	七—八年	一五〇	一〇〇	一五〇	三、五	三、〇	一、〇	二、九九八	二、五三五	三、〇六〇	二、〇	一、四二五	一、五三五	二、〇六〇	一、五三五
五—六年	五—六年	五—六年	一五〇	七〇	一五〇	三、〇	三、〇	二、五	二、二九八	一、八六〇	二、〇五五	二、〇	一、四二五	一、五三五	二、〇五五	一、五三五
三—四年	三—四年	三—四年	一〇〇	五〇	一〇〇	二、五	二、五	一、〇	一、七八〇	一、四二五	一、五三五	二、〇	一、四二五	一、五三五	一、五三五	一、五三五
一年	一年	一年	一〇〇	五〇	一〇〇	二、〇	二、〇	一、〇	一、三六〇	〇、九二八	一、〇五五	一、〇	一、四二五	一、五三五	一、五三五	一、五三五

施用上の注意

- 一、桃は稍々瘠せた土地即ち砂壤土に施肥を加減しながら栽培するのがよい、余り肥沃なる埴土に於ては徒長に過ぎて結果の少ない場合が多い。
- 一、石灰の適量(一五—二〇貫)は枝を短大強健ならしめて落果を防止することが著しいが多量は却つて風味を害する場合もあるから注意を要する。
- 一、右肥料は二月下旬乃至三月上旬に施用する。
- 一、密植の場合には肥料を二—三割多く施用すること。

六、葡

萄 (反當七五、六本植)

樹令	肥料	堆肥	大粕豆	鱧ノ粕	種粕	硫安	普通過磷酸	加硫里酸	反當成分量
一	〇	三〇〇	二〇	一六	一五	六、〇	二〇、〇	九、〇	六、二三八
七	八	二五〇	一五	一三	二二	六、〇	一六、〇	七、五	五、一五六
五	六	二〇〇	三	七	一〇	五、〇	一三、〇	六、〇	三、九五四
三	四	一五〇	七	三	五	三、五	七、〇	三、五	二、四五二
一	年	一〇〇貫	五貫	一貫	一貫	三、〇貫	五、五貫	一、五貫	一、四三四
									一、二九八
									一、二九五
									二、一〇五
									四、一六〇
									五、一九五
									六、二七〇

施用上の注意

- 一、右表は元肥にして二月中旬頃施用する。
- 一、追肥は結實後樹勢に應じて六月上、中旬主として窒素肥料を施用する。
- 一、石灰は葡萄の品質を良好にするから冬期反當二〇―三〇貫撒布する。
- 一、右標準量は米國種、甲州種に對するものであるが、歐州種は之の七割位にて差支なし。

附 録

一、肥料成分早見表

肥料名	數量	含有成分量	
		窒素	磷酸
硫酸アンモニヤ アンモニヤ性窒素 20.6%	1貫	20.6	—
	2貫	41.2	—
	3貫	61.8	—
	4貫	82.4	—
	5貫	103.0	—
	6貫	123.6	—
	7貫	144.2	—
		有効成分量	
		窒素	磷酸
		20.6	—
		41.2	—
		61.8	—
		82.4	—
		103.0	—
		123.6	—
		144.2	—

石灰窒素 シアンミツド態窒素 20.0%	數量	含有成分量	
		窒素	磷酸
石灰窒素	1貫	20.0	—
	2貫	40.0	—
	3貫	60.0	—
	4貫	80.0	—
	5貫	100.0	—
	6貫	120.0	—
	7貫	140.0	—
		有効成分量	
		窒素	磷酸
		20.0	—
		40.0	—
		60.0	—
		80.0	—
		100.0	—
		120.0	—
		140.0	—

精 過 磷 酸						
四、〇	一五、〇	八二二	七六八			
五、〇	一四、〇	六〇九	五九二			
二、〇	一三、〇	四〇六	三九四			
一、〇	一二、〇	二〇三	一九七			
	一一、〇	一〇二				
	一〇、〇	九一				
	九、〇	八〇				
	八、〇	七〇				

普 通 過 磷 酸 可溶性磷酸 一六、〇% 磷酸全量 一六、五%	石 灰 窒 素	肥 料 名	數 量	含有成分量	有效成分量
				窒 素 磷 酸 加 里	窒 素 磷 酸 加 里
八、〇	一〇、〇		八貫		
七、〇	九、〇		八〇		
六、〇	八、〇		八〇		
五、〇	七、〇		八〇		
四、〇	六、〇		八〇		
三、〇	五、〇		八〇		
二、〇	四、〇		八〇		
一、〇	三、〇		八〇		
	二、〇		八〇		
	一、〇		八〇		

硫酸加里	
溶里性	加里
四八、〇%	
一、〇〇〇	四、八〇〇
二、〇〇〇	九、六〇〇
三、〇〇〇	一、四四〇
四、〇〇〇	一、九二〇
五、〇〇〇	二、四〇〇
六、〇〇〇	二、八八〇
七、〇〇〇	三、三六〇
八、〇〇〇	三、八四〇
九、〇〇〇	四、三二〇
一〇、〇〇〇	四、八〇〇

肥料名	數量	含有成分量	
		加里	加里
精過磷酸 磷酸全量 二〇、三% 可溶性磷酸 一九、七%	五、〇貫	一、〇五	九、五
	六、〇〇	一、二八	一、二
	七、〇〇	一、四二	一、三九
	八、〇〇	一、六四	一、五七
	九、〇〇	一、八七	一、七五
	一〇、〇〇	二、〇〇	一、九七
	一一、〇〇	二、二二	二、一七
	一二、〇〇	二、四四	二、三六
	一三、〇〇	二、六六	二、五六
	一四、〇〇	二、八八	二、七五
一五、〇〇	三、一〇	二、九五	

大豆粕		加磷		加里	
六、二%		一、〇%		一、五%	
10,0	1,140	100	300	992	70
15,0	930	150	225	744	53
20,0	620	200	150	496	35
30,0	558	300	135	446	33
40,0	496	400	120	397	28
50,0	434	500	105	347	25
60,0	372	600	90	298	22
70,0	310	700	75	248	18
80,0	248	800	60	198	14
90,0	186	900	45	149	11
100,0	124	1000	30	99	7
110,0	62	1100	15	50	4

鹽化加里		加水溶性		六、〇%	
10,0	6,000	100	6,000	100	6,000
15,0	5,400	150	5,400	150	5,400
20,0	4,800	200	4,800	200	4,800
30,0	4,200	300	4,200	300	4,200
40,0	3,600	400	3,600	400	3,600
50,0	3,000	500	3,000	500	3,000
60,0	2,400	600	2,400	600	2,400
70,0	1,800	700	1,800	700	1,800
80,0	1,200	800	1,200	800	1,200
90,0	600	900	600	900	600
100,0	0	1000	0	1000	0

種	
加磷窒	里酸素
一、〇% 二、五% 五、四% 粘	
二〇、〇	一、〇
一五、〇	二、〇
一〇、〇	三、〇
九、〇	四、〇
八、〇	五、〇
七、〇	六、〇
六、〇	七、〇
五、〇	八、〇
四、〇	九、〇
三、〇	一〇、〇
二、〇	一一、〇
一、〇	一二、〇
一〇、八〇	一、八〇〇
八、一〇	一、三五〇
五、四〇	九〇〇
四、八六	八〇〇
四、三三	七〇〇
三、七八	六〇〇
三、三四	五〇〇
二、七〇	四〇〇
二、二六	三〇〇
一、六二	二〇〇
一、〇八	一〇〇
五、四	五〇
五〇〇	二五
三七五	一〇
二五〇	〇
二二五	〇
二〇〇	〇
一七五	〇
一五〇	〇
一二五	〇
一〇〇	〇
七五	〇
五〇	〇
二五	〇
八、一〇	一、五〇〇
六、〇八	一、二〇〇
四、〇五	九〇〇
三、六五	八〇〇
三、三四	七〇〇
二、八四	六〇〇
二、四三	五〇〇
二、〇三	四〇〇
一、六二	三〇〇
一、三三	二〇〇
一、〇一	一〇〇
一、七五	五〇
一、三二	二五
〇、八八	一〇
〇、七九	〇
〇、七〇	〇
〇、六一	〇
〇、五三	〇
〇、四四	〇
〇、三五	〇
〇、二五	〇
〇、一〇	〇
〇、〇五	〇

錫		肥料名	數量	含有成分量	加量	有效成分量	加量
加磷窒	里酸素						
五、〇% 九、〇% 粘							
二〇、〇	一、〇	窒素	一貫	九〇	五	七	三
一五、〇	二、〇	磷酸	一、八〇〇	七五〇	一〇〇	一五三	〇
一〇、〇	三、〇	里	九〇〇	五〇〇	二〇〇	二〇〇	〇
九、〇	四、〇	窒素	八〇〇	四五〇	一〇〇	三〇六	〇
八、〇	五、〇	磷酸	七〇〇	四〇〇	一〇〇	二八三	〇
七、〇	六、〇	里	六〇〇	三五〇	一〇〇	二六九	〇
六、〇	七、〇	窒素	五〇〇	三〇〇	一〇〇	二五三	〇
五、〇	八、〇	磷酸	四〇〇	二五〇	一〇〇	二三〇	〇
四、〇	九、〇	里	三〇〇	二〇〇	一〇〇	二一五	〇
三、〇	一〇、〇	窒素	二〇〇	一五〇	一〇〇	一九五	〇
二、〇	一一、〇	磷酸	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一六三	〇
一、〇	一二、〇	里	〇	〇	〇	一三〇	〇
一〇、八〇	一、八〇〇	窒素	一、五〇〇	七六五	六五〇	一〇八	〇
八、一〇	一、三五〇	磷酸	一、二〇〇	六八九	四八八	〇	〇
五、四〇	九〇〇	里	七六五	三三五	〇	〇	〇
四、八六	八〇〇	窒素	六八九	二九三	〇	〇	〇
四、三三	七〇〇	磷酸	六二二	二六〇	〇	〇	〇
三、七八	六〇〇	里	五三六	二三八	〇	〇	〇
三、三四	五〇〇	窒素	四九九	一九五	〇	〇	〇
二、七〇	四〇〇	磷酸	三八三	一六三	〇	〇	〇
二、二六	三〇〇	里	三〇六	一三〇	〇	〇	〇
一、六二	二〇〇	窒素	二七〇	九八	〇	〇	〇
一、〇八	一〇〇	磷酸	一八〇	六五	〇	〇	〇
五、四	五〇	里	一〇〇	三五	〇	〇	〇
五〇〇	二五	窒素	〇	〇	〇	〇	〇
三七五	一〇	磷酸	〇	〇	〇	〇	〇
二五〇	〇	里	〇	〇	〇	〇	〇
二二五	〇	窒素	〇	〇	〇	〇	〇
二〇〇	〇	磷酸	〇	〇	〇	〇	〇
一七五	〇	里	〇	〇	〇	〇	〇
一五〇	〇	窒素	〇	〇	〇	〇	〇
七五	〇	磷酸	〇	〇	〇	〇	〇
〇、八〇	〇	里	〇	〇	〇	〇	〇
〇、一〇	〇	窒素	〇	〇	〇	〇	〇
〇、〇五	〇	磷酸	〇	〇	〇	〇	〇

米 (1) 重 量 糠	米 (1) 容 量 糠 一加磷窒 升 重里酸素 量 二五三 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇
三〇、二、一、〇、貫	五〇、四、三、二、〇、五、一、升
四、三、二、五	一七、一、三、八、一〇、四、六、九、三、五、一、七、三
九〇、六〇、三〇	三、四、五、二、七、二、〇、七、一、三、八、六、九、三、五、七
三〇、二〇、一〇	一、五、九、六、四、四、三、三、二、二
三三、二二、一一	二、三、九、八、七、四、四、九、二、五、二、二、二
三三、二二、一一	二、三、九、七、七、三、四、八、二、四、三、二、二
一五、一〇、五	五、八、四、六、五、三、三、二、二、六、一

蒸 製 窒 酸 素 二、〇、 四、〇、 粉	肥 料 名 稱	數 量	含 有 成 分 量 窒 素 一 磷 酸 一 加 里 窒 素 一 磷 酸 一 加 里	有 效 成 分 量 窒 素 一 磷 酸 一 加 里
二〇、一五、一〇、九、八、七、六、五、四、三、二、一、〇、貫			八〇〇、六〇〇、四〇〇、三〇〇、三〇〇、二八〇、二四〇、二〇〇、一六〇、一四〇、一〇〇、八〇、四〇、〇、〇	六八〇、五〇〇、三〇〇、三〇〇、二七〇、二三八、二〇四、一七〇、一三六、一〇一、六八、二六、一、二、一、〇
			四、二、一、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇	
			二、七、三〇、二、〇、四八、一、三、六五、一、二、三九、一、〇、九三、九、五、六、八、九、九、六、八、三、五、四、六、四、〇、〇、二、七三、一、七、三	

木 (1)重 量 灰	(1)容 一加磷 升重 里酸 一九五 二、五% 三%
一、七〇 二、六〇 三、五〇 四、四〇 五、三〇 六、二〇 七、一〇	五〇 四〇 三〇
一七五 一五〇 一二五 一〇〇 七五 五〇 二五	二四四 一九五 一四六
六三〇 五四〇 四五〇 三六〇 二七〇 一八〇 九〇	八七八 七〇二 五二七
五〇五 四三三 三六〇 二八八 二一六 一四四 七二	七〇四 五六三 四三二

木 灰	米 (1)重 量 糠	肥 料 名 稱	數 量	含有成分 量 窒 素 一 磷 酸 加 量 里	有效成分 量 窒 素 一 磷 酸 加 量 里
二〇 二〇 五 一 升	一〇、〇 九、〇 八、〇 七、〇 六、〇 五、〇 四、〇		貫	窒 素 一 磷 酸 加 量 里	有 效 成 分 量 窒 素 一 磷 酸 加 量 里
	一五〇 一三五 一三〇 一〇五 九〇 七五 六〇		外	二〇〇 二七〇 二四〇 二二〇 一八〇 一五〇 一二〇	二〇〇 二七〇 二四〇 二二〇 一八〇 一五〇 一二〇
三五一 一七六 八八 二八	一〇〇 九〇 八〇 七〇 六〇 五〇 四〇		外	一〇五 九五 八四 七四 六三 五三 四三	一〇五 九五 八四 七四 六三 五三 四三
二八二 一四一 七〇 一四	五〇 四五 四〇 三五 三〇 二五 二〇		外		

藁										
(二)重										
量										
灰										
10.0	9.0	8.0	7.0	6.0	5.0	4.0	3.0	2.0	1.0	貫
100	90	80	70	60	50	40	30	20	10	
400	360	320	280	240	200	160	120	80	40	
310	288	266	244	222	200	178	156	134	112	

藁		木	肥料名								
(一)容											
一加磷	升										
重里酸	量										
四一											
六〇〇%											
勿%											
灰		灰									
五	四	三	二	一	五	一	升	10.0	9.0	8.0	貫
30	24	18	12	6	3	1		250	235	220	勿
200	160	120	80	40	20	10		900	810	720	勿
96	75	54	33	12	6	3		710	648	586	勿

ル ー ビ ン	青 刈 大 豆 (生)		
	加 里 0.6%	磷 酸 0.1%	窒 素 0.55%
五〇	五〇〇	四〇〇	三〇〇
一〇〇	二,七五〇	二,二〇〇	一,六五〇
一五〇	五〇〇	四〇〇	三〇〇
二五〇	一,一〇〇	一,一〇〇	一,一〇〇
三〇〇	一,三七五	一,一〇〇	一,一〇〇
三五〇	八五〇	一,一〇〇	一,一〇〇
四〇〇	五五〇	一,一〇〇	一,一〇〇
四五〇	二七五	一,一〇〇	一,一〇〇
五〇〇	三〇〇	一,一〇〇	一,一〇〇
五五〇	三〇〇	一,一〇〇	一,一〇〇
六〇〇	三〇〇	一,一〇〇	一,一〇〇
六五〇	三〇〇	一,一〇〇	一,一〇〇
七〇〇	三〇〇	一,一〇〇	一,一〇〇
七五〇	三〇〇	一,一〇〇	一,一〇〇
八〇〇	三〇〇	一,一〇〇	一,一〇〇
八五〇	三〇〇	一,一〇〇	一,一〇〇
九〇〇	三〇〇	一,一〇〇	一,一〇〇
九五〇	三〇〇	一,一〇〇	一,一〇〇
一〇〇〇	三〇〇	一,一〇〇	一,一〇〇

紫 雲 英 (生)	肥 料 名		
	加 里 0.3%	磷 酸 0.1%	窒 素 0.4%
五〇	一,〇〇〇	四,〇〇〇	二,〇〇〇
一〇〇	九〇〇	三,六〇〇	一,八〇〇
一五〇	八〇〇	三,二〇〇	一,六〇〇
二〇〇	七〇〇	二,八〇〇	一,四〇〇
二五〇	六〇〇	二,四〇〇	一,二〇〇
三〇〇	五〇〇	二,〇〇〇	一,〇〇〇
三五〇	四〇〇	一,六〇〇	八〇〇
四〇〇	三〇〇	一,二〇〇	六〇〇
四五〇	二〇〇	八〇〇	四〇〇
五〇〇	一〇〇	六〇〇	三〇〇
五五〇	五〇	四〇〇	二〇〇
六〇〇	五〇	三〇〇	一〇〇
六五〇	五〇	二〇〇	五〇
七〇〇	五〇	一〇〇	五〇
七五〇	五〇	一〇〇	五〇
八〇〇	五〇	一〇〇	五〇
八五〇	五〇	一〇〇	五〇
九〇〇	五〇	一〇〇	五〇
九五〇	五〇	一〇〇	五〇
一〇〇〇	五〇	一〇〇	五〇

肥料名	數量	含有成分量		有效成分量	
		窒素	磷酸	窒素	磷酸
ル ー ビ ン (生)	1貫	700	1100	400	700
	100	100	100	50	100
	1000	1000	1000	1000	1000
	900	900	900	900	900
	800	800	800	800	800
	700	700	700	700	700
	600	600	600	600	600
	500	500	500	500	500
	400	400	400	400	400
	300	300	300	300	300

肥料名	數量	含有成分量		有效成分量	
		窒素	磷酸	窒素	磷酸
加 磷 窒 里 酸 素 0.5% 0.1% 0.5% 肥	1貫	700	1100	400	700
	100	100	100	50	100
	1000	1000	1000	1000	1000
	900	900	900	900	900
	800	800	800	800	800
	700	700	700	700	700
	600	600	600	600	600
	500	500	500	500	500
	400	400	400	400	400
	300	300	300	300	300

二、肥料成分表
(一) 動物質肥料

肥料名	水分	窒素	磷酸	加里
人糞尿	九五、〇〇%	〇、五〇%	〇、一〇%	〇、三〇%
人糞	〇、二七	一、四〇	〇、三六	〇、三三
乾糞	九六、七	〇、四三	〇、〇六	〇、二八
牛糞	九七、三〇	一、九四	二、三三	一、〇七
牛糞尿	九四、四六	〇、三三	〇、四九	〇、一五

肥料名	數量	含有成分量		有效成分量	
		窒素	磷酸加里	窒素	磷酸加里
下肥	五〇〇貫	二、五〇〇	一、五〇〇	二、五〇〇	七五〇
堆肥及厩肥	五〇	二五〇	二五〇	七五	二五
加里	一〇〇	五〇〇	五〇〇	一五〇	七五
窒素	一五〇	七五〇	七五〇	二二五	一三
磷酸	二〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	三〇〇	一五〇
里	三〇〇	一、五〇〇	一、五〇〇	四五〇	二四五
加里	四〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	六〇〇	三三〇
堆肥	五〇〇	二、五〇〇	二、五〇〇	七五〇	一、二五〇

出糞	家鴨糞(生)	鷓鴣糞(生)	鷓鴣糞(乾)	鷓鴣糞(生)	鷓鴣糞(乾)	同糞(生)	同糞(乾)	干糞沙	同糞(乾)	同糞(生)	浸糞
糞(生)	五六、六〇	七、一〇	五二、一〇	五、六、五〇	九、一〇	一一、〇〇	五、七、〇〇	六〇、〇〇	九、三〇	七、九、〇〇	九、六〇
糞(生)	一、〇〇	〇、五、五	一、七、六	一、二、〇	二、八〇	二、五、三、五	一、一、一、五	一、四、五	八、一、七	一、九、〇	一、一、三、四
糞(生)	一、四〇	〇、五、四	一、七、八	一、〇、九	〇、九、七	〇、四、〇、九	〇、二、五	〇、二、五	一、三、一	〇、四、五	一、四、九
糞(生)	〇、六、二	〇、九、二	一、〇〇	〇、三、九	一、八、〇	二、二、一、三、〇	一、〇、一、三	〇、一、一	〇、四、六	〇、二、〇	〇、六、〇

肥料名	水分(%)	窒素(%)	磷酸(%)	加里(%)
馬糞	七三、〇四	〇、二、八	〇、五、〇	〇、一、九
馬尿	九四、三、五	〇、七、一	〇、〇、三	一、四、七
豚糞	七六、〇、八	〇、五、三	〇、〇、四	〇、三、三
豚尿	九八、一、四	〇、三、九	〇、〇、七	〇、三、八
羊糞	六八、〇、〇	〇、六、〇	〇、三、〇	〇、二、〇
羊尿	九六、一、四	〇、八、〇	〇、〇、一	一、一、四
兔糞	五四、四、〇	一、一、〇	〇、四、〇	—
兔尿	九八、七、〇	〇、二、〇	〇、〇、五	—
鷓鴣糞(乾)	(自給飼料)	一、五、五	二、一、八	〇、六、〇
鷓鴣糞(生)	(配合飼料)	三、二、五	三、八、八	一、〇、四
右基準成分(乾)	10、(配合飼料)	三、〇、〇	三、〇、〇	一、〇、〇
同右(生)	七〇、(同)	一、〇、〇	一、〇、〇	〇、三、〇

鯉	鱈	鱈	鱈	直	雜	鱈	鱈	生	サ	大	鱈
	肝		し		魚	煮			ッ	羽	荒
粕	油		魚						ハ		鱈
粕	粕	粕	粕	粕	粕	汁	鱗	鱈	粕	粕	粕

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

七、九五	七、五〇	六、五八	八、三四	八、七四	六、〇〇	一、〇〇—〇、六〇	四、〇二	四、五五	六、四八	一〇、二〇	八、六二
------	------	------	------	------	------	-----------	------	------	------	-------	------

七、六七	一〇、五〇	一、七二	一〇、一五	五、九六	六、〇〇	〇、五〇	一五、六六	二、七〇	八、八四	四、五〇	八、一八
------	-------	------	-------	------	------	------	-------	------	------	------	------

		二、五三									
--	--	------	--	--	--	--	--	--	--	--	--

鯉	乾	鯉	鯉	鯉	乾	白	笹	胴	鯉	同	鯉
頭	メ		鱈						メ		
粕	鱈	粕	鱈	粕	鱈	子	目	鱈	粕	(乾)	(生)

	八、〇〇									一七、〇〇	一三、〇〇	一五、〇〇	一〇、五〇		九二、〇〇
--	------	--	--	--	--	--	--	--	--	-------	-------	-------	-------	--	-------

六、四七	七、〇〇	九、〇〇	二、五〇—五、五〇	八、三〇	七、六〇	一一、五〇	七、五〇	八、〇〇	九、五〇	三、五〇	四、八八
------	------	------	-----------	------	------	-------	------	------	------	------	------

八、二九	四、〇〇	五、〇〇	九、〇〇—一五、〇〇	一、四〇	三、〇〇	六、五〇	五、〇〇	四、五〇	四、〇〇	一、七八	〇、六八
------	------	------	------------	------	------	------	------	------	------	------	------

	〇、六〇				〇、五〇			〇、七〇			一、一〇	〇、四八
--	------	--	--	--	------	--	--	------	--	--	------	------

鯨肉	キ	魚類	魚肥	魚肥	魚鱗	荒粕	小物	乾鮫	太刀魚	鮫油
粉	粉	ナ	生)	鷹	エ	キ	ス	鱗	粕	鮫

			五八、六〇		四一、九四			三三、〇三		一九、七六	二二、一九
--	--	--	-------	--	-------	--	--	-------	--	-------	-------

六、四九	七、七四	七、八四	二、八〇	五、八五	五、八四	二、〇一	六、三六	五、七二	四、九五	九、一一	二、三三
------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------

二、九二	二、一九	四、七九	三、四〇	二、九九	一、九七	五、七二	九、九六	九、三二	二、三二	四、二三	〇、四六
------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------

											〇、三四
--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	------

鮫	鯨	鮫	鮫	鮫	鮫	鮫	鮫	鮫	鮫	鮫	鮫
節出	煮出	頭	荒								
粕	粕	粕	粕	粕	粕	粕	粕	粕	粕	粕	粕

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

八、九二	二、〇〇	九、三五	七、〇四	八、五〇	七、七九	九、六〇	八、九二	一〇、八〇	八、六一	七、二六	三、四
------	------	------	------	------	------	------	------	-------	------	------	-----

五、二二	五、一一	四、二六	六、五二	四、六〇	四、一七	四、五〇	五、七八	〇、八三	一、五六	七、五八	一〇、八七
------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	-------

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

肥料名	水分(%)	窒素(%)	磷酸(%)	加里(%)
牛骨粉		三、八七	二、二五	
蒸製蹄角骨粉		一〇、四六	八、三九	
膠骨粉	六、〇二	六、二八	〇、八八	
脫膠骨粉		一、一一	三、一九	
同(基準)		四、〇〇	二、〇〇	
蒸製骨粉	七、五二	四、一三	二、三三	
生骨粉		四、〇二	二、二七	
小貝類		〇、六〇—二、二〇	〇、八〇—二、五〇	〇、四〇
やどかり(乾)	三、〇〇	〇、六〇	〇、二〇	
田螺(乾)	五、五〇	一、七〇	〇、四〇	
イナゴ粕		一〇、二六	一、二八	
摺虫		三、九六	一、七二	

肥料名	水分(%)	窒素(%)	磷酸(%)	加里(%)
櫻貝(セブタ貝)		〇、六三	〇、二五	〇、三三
人手粕	三、七〇	三、〇九	〇、七二	〇、一〇
海露		一、四〇	〇、六〇	一、一三
海栗粕(ウニ)		三、九四	一、二〇	
海老皮		一、八四	〇、九七	
海老粕		五、三四	三、四七	
蟹殻粕		六、三七	二、四四	
蟹粕		四、九九	四、六四	
蟹粕		四、三二	二、四四	
蟹粕		三、九六	一、七四	
烏賊内臓メ粕		四、二五	一、〇一	
鯨釜底		五、二九	一、五、一四	

品名	水分(%)	窒素(%)	磷酸(%)	加里(%)
磷酸質グアノ	20.96	0.91	11.24	1.06
溶解グアノ		0.99	11.74	
タンケイ		6.91	13.07	
血骨粉		6.24	13.61	
屠殺場廢棄物		2.89	1.74	
同廢棄物煮汁		0.77	0.08	
蹄角粉		11.01	3.96	
蒸製蹄粉		13.18	0.51	
乾血粉		11.75	1.12	
血粉		11.75	1.00	
皮粉		5.03	0.97	
皮革粉		5.09		

品名	水分(%)	窒素(%)	磷酸(%)	加里(%)
生牛骨粉		3.52	19.95	
細工骨粉		3.76	23.85	
細工牛骨粉		3.37	23.60	
魚骨粉		6.25	15.87	
鳥骨粉		5.25	16.71	
鯨骨粉		2.73	26.28	0.11
蒸製鯨骨粉		3.33	24.19	
鯨肉骨粉		8.24	8.43	0.53
肉骨粉		6.01	13.76	
骨灰			3.40	0.10
骨炭		0.80	29.00	1.00
窒素質グアノ(並)		4.08	10.00	1.00

(二) 植物性肥料

肥料名	水分(%)	窒素(%)	磷酸(%)	加里
種粕(內產地)	八、七	五、四〇	二、五〇	一、〇〇
同 (支那產)		四、八一	二、四七	
同 (印度產)		四、九三	二、二五	
藥付種粕	八、三	四、九	二、五〇	
再製種粕		四、八四	二、三〇	
芥子油粕		五、五三	二、五二	
綿實油粕	九、五六	五、三〇	二、〇〇	一、〇〇
藥付綿實油粕		三、七八	一、七七	

肥料名	水分(%)	窒素(%)	磷酸(%)	加里
人毛髮		一〇、三	〇、四五	
羽毛		四、九	〇、五七	
羽毛(乾)	三、〇五	三、三		
毛(濕)	七〇、一〇	五、〇四		
羊毛	三、七〇	七、八一	〇、二二	二、〇九
雞毛		一〇、七	二、〇四	
羅紗	三、九二	六、六七		
紡績屑		一、四四	〇、六一	
絹粉屑	二、四三	五、三		
絹粉		五、二四		

茶	桐	榧	樅	雜	同	再	米	同	大	裸
實	實	實	實	植	製	雜	糖	糖	麥	麥
油	油	油	油	物	雜	植	油	油	糠	糠
粕	粕	粕	粕	油	物	植	(朝鮮產)	(內地產)	粕	粕
				上	粕	粕				

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

1,00	2,60	2,00	2,10	1,00	4,85	3,75	4,97	1,50	1,10	2,50	1,27	2,68
------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------

0,40	1,00	1,00	0,00	2,15	1,57	2,13	3,00	3,00	2,00	5,00	1,06	1,39
------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------

			1,00	1,18	0,80	1,00		1,00	1,00	1,50	0,76	
--	--	--	------	------	------	------	--	------	------	------	------	--

棉	綿	大	撒	落	荏	胡	麻	亞	葛	椰	椿
實	實	豆	豆	花	油	麻	實	麻	子	子	實
殼	屑	油	油	油	油	油	油	油	油	油	油
		粕	粕	粕	粕	粕	粕	粕	粕	粕	粕

				9,64	8,62	6,93	9,85	8,82	2,84	8,03	2,23
--	--	--	--	------	------	------	------	------	------	------	------

1,6	1,21	6,20	7,20	6,20	6,00	6,00	4,50	5,00	4,80	3,00	2,00
-----	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------

0,4	0,50	1,00	1,30	1,00	1,80	2,00	2,00	1,00	1,70	1,00	0,70
-----	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------

		1,50	1,80	1,00	1,00	1,00	1,00	1,00	1,00	1,50	1,00
--	--	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------

肥料名
水分(%)
窒素(%)
磷酸(%)
加里(%)

豆	小	同	餠	同	酢	馬	甘	澱	味	同	醬
腐						鈴	蕪	粉	噌		油
殼(乾)	粕	(乾)	粕(生)	(乾)	粕(生)	薯	粕	粕	粕	(生)	粕(乾)

		三、〇〇	六七、八〇		六〇、〇〇			三三、三三		二七、五五	三、三六
--	--	------	-------	--	-------	--	--	-------	--	-------	------

四、八〇	二、四六	五、三〇	一、九〇	二、五〇	一、〇七	一、三六	一、六八	〇、六〇	四、八六	二、四五	三、八一
------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------

〇、九四	〇、五九	一、〇〇	〇、三五	〇、五〇	〇、二四	〇、三一	〇、七三	〇、一六	〇、五八	〇、四七	〇、四九
------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------

		〇、七							〇、五三	〇、四五	〇、四九
--	--	-----	--	--	--	--	--	--	------	------	------

奈	麥	ホ	同	麥	同	燒	高	同	酒	稈	小
良	芽	ツ		酒		酎	梁			麥	麥
漬	粕(乾)	粕	(乾)	粕(生)	(乾)	粕(生)	粕	(乾)	粕(生)	糠	穀

	八、〇〇		三、〇〇	七五、六〇					六二、〇〇		
--	------	--	------	-------	--	--	--	--	-------	--	--

三、二七	三、六八	四、二七	二、八〇	〇、七八	三、二七	一、九八	三、六七	五、七一	二、三九	一、九〇	二、四四
------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------

〇、二九	一、八三	〇、六三	一、四〇	〇、三九	〇、七四	〇、四六	一、九三	〇、六九	〇、三三		一、二八
------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	--	------

	二、〇八		〇、一五	〇、〇四	〇、〇八	〇、〇五	一、二二		〇、一〇		〇、九九
--	------	--	------	------	------	------	------	--	------	--	------